

第1章 陶邑周辺部における須恵器生産点描

江浦 洋

第1節 序説

1. 本稿の目的と前提

本稿は大阪文化財センターが行った日置荘遺跡の調査成果を中心とし、陶邑周辺部における須恵器生産の様相を明らかにするために必要な基礎データを総括的に提示することを目的とする。

なお、個別具体的な問題点については、必ずしも十分な検討を加えることができないが、Ⅲ調査区の須恵器窯L-1出土須恵器については、器種構成の検討とそれに基づく分類、さらには数量的・技法的特徴についての検討を行う。また、Ⅳ調査区で検出した須恵器窯P-1については、床面Ⅰから出土した須恵器を対象として、ヘラ記号を基軸とした分析を行い工人組織についても言及する。

したがって、本稿において分析の対象とする遺構はいずれも6世紀代の須恵器窯であるⅢ調査区の須恵器窯L-1およびⅣ調査区の須恵器窯P-1である。

いずれも狭義の陶邑窯跡群¹⁾からははずれるものの、それとは無関係であったとは考えられない位置に展開する須恵器窯である。以下、出土した須恵器を基軸として分析を加えていくことにしたい。

2. 日置荘遺跡検出の古墳時代遺構概観

日置荘遺跡における古墳時代の遺構分布は濃密とはいえないものの、Ⅳ調査区検出の埴輪窯跡をはじめとして重要な遺構を検出している。その位置については図1に示した通りであり、須恵器窯が密集する陶邑窯跡群の中心部からははずれ、その北側約4kmに位置している。以下、各調査区検出の古墳時代の遺構・遺物の概略を列記しておく。

I 調査区 西除川左岸部のA地区において古墳時代に帰属すると考えられる掘立柱建物跡5棟とその東側から土器集積遺構である土器群A-1を検出している。土器群A-1では須恵器と土師器が混在して出土しており、時期は6世紀前半である。土師器竈を含む点や須恵器では大型杯のほかに高杯が目立つなどの点が特徴的であり、焼成不良や焼き歪みのある須恵器が僅かに含まれることなど、単なる廃棄の結果とは考えがたいものである。

II 調査区 古墳時代に帰属する遺構は少ないが、溝G-119および谷J-2から6世紀代の須恵器蓋杯が出土している。

III 調査区 L地区検出の開析谷東岸から6世紀後半の須恵器窯跡1基を検出している（須恵器窯L-1）。上部を大きく削平されているが、窯体下半部以下の構造は比較的良好に遺存している。遺物の詳細については後述するが、器種や技法面で特徴的な須恵器も出土している。また、発掘調査対象とはなっていないが、西側の今池西岸でも同時期の須恵器窯1基を確認している（剣池西窯跡²⁾）。

IV 調査区 P地区において検出した開析谷西岸から6世紀後半の須恵器窯P-1および埴輪窯P-1を検出している。当該地は従前の調査で埴輪窯跡（日置荘西町窯³⁾）が確認されていた部分に該当しており、今回検出の窯跡も一連のものと考えられる。埴輪窯P-1では3時期の作業面が検出されており、それぞれから多数の埴輪が出土している。灰原からは人物・家などの形象埴輪も出土しているが、窯体内からは円筒埴輪のみが出土している。6世紀代の円筒埴輪としては大型であることを特徴とする。



V-1-図1 日置荘遺跡周辺の須恵器窯分布図

須恵器窯P-1からは2時期の操業面の存在が報告されており、そのうちの床面Ⅰでは厳密には原位置を保っていないものの、同一ヘラ記号をもつ蓋杯がまとまりをもって出土している。

そのほか、両窯跡の東側谷部で検出した河道P-2からは須恵器生産に関わる叩き板2点と当て具3点が出土している。

第2節 III調査区須恵器窯L-1の基礎的検討

1. 須恵器窯L-1出土遺物の基礎分析

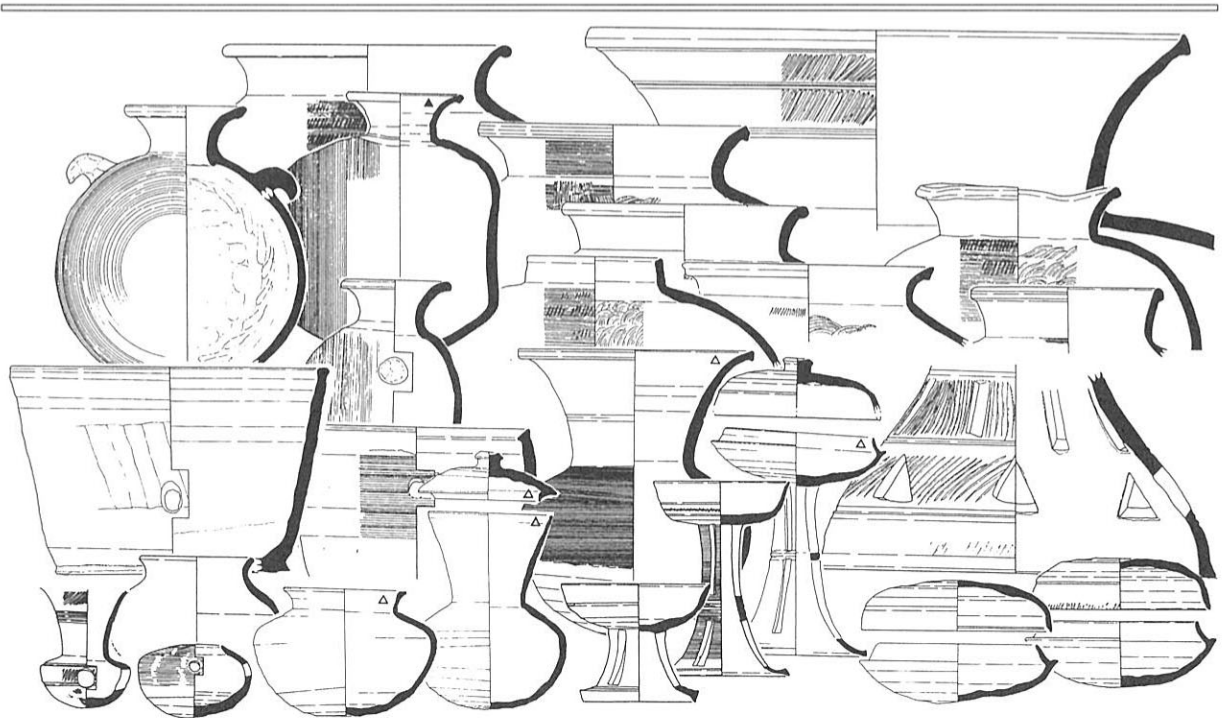
須恵器窯L-1からは破片数にして36,935点、重量にして941.45kgの須恵器が出土している。灰原からは数点の土師器も出土しているが、その大多数は須恵器である。出土した須恵器については当窯における須恵器生産の具体相を明確にし、陶邑窯跡群およびその周辺地域における須恵器生産体制究明のための基礎データを提示することを目的としてすべての出土遺物を観察してデータ化を行った。

作業は、基礎作業として先学の分類に準拠するかたちで、形態による細分作業および技法的特徴の属性分類作業を起点として行い、それを基準として破片数、重量、口縁残存度を計測した。さらに、最も出土数の多い蓋杯のうち、特徴的な技法を有するものをピックアップして個別に検討を加えた。

A 出土須恵器の器種構成

出土した須恵器の器種構成は、その多寡に関わらず列举すると以下のようになる（図2）。

蓋杯（杯身・杯蓋）、高杯（有蓋短脚高杯・有蓋長脚高杯・無蓋短脚高杯・無蓋長脚高杯）、高杯蓋、甗（有頸甗・無頸甗）、器台、壺（短頸壺・直口壺・広口壺）、壺蓋、提瓶、横瓶、甕、鉢（すり鉢・バケツ形鉢）



V-1-図2 須恵器窯L-1出土須恵器の器種構成

（無印は日置荘須恵器窯L-1、▲はTK85号窯、△は一須賀古墳群出土資料）

灰原出土資料という制約を考慮するならば、生産されていた須恵器のすべてを表出しているとは限らないが、器種構成は同時期の須恵器窯と基本的に類似している。

ただ、当須恵器窯で特徴的な点は、ごく一般的な形態と認知されている須恵器の器種のほかに、バケツ形の鉢⁴⁾や無頸甕⁵⁾などの特異な形態を呈する須恵器もわずかであるが出土していることである。

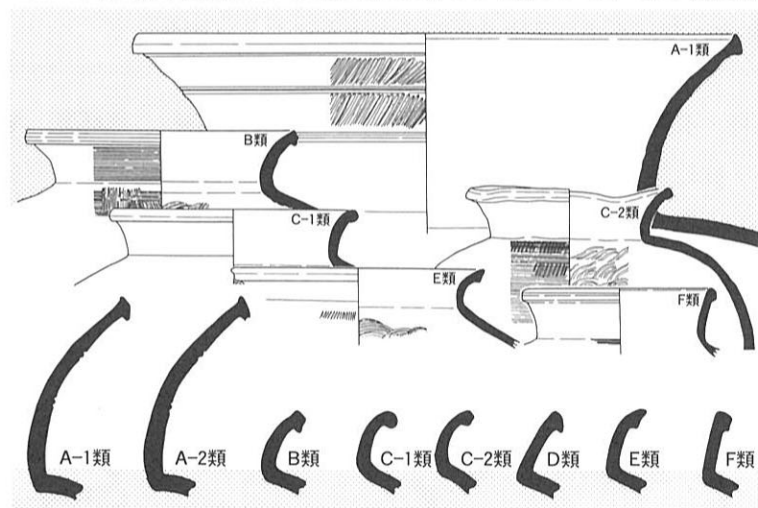
B 須恵器窯L-1出土須恵器の分類

当窯から出土した須恵器の器種は前項で示したように基本的には当該期の須恵器窯出土須恵器の器種構成と大きく変わるものではない。したがって、その分類にあたっては既述の研究⁶⁾に基本的に準拠しており、とくに必要と認められる甕の口縁部形態による細分と蓋杯の技法の特徴による細分作業のみを行っている。ただ、甕の口縁部形態による分類作業については図3に示したような細分を行っているが、これは数量化に際しての作業を進める上での分類作業であり、本稿では略述するにとどめる。

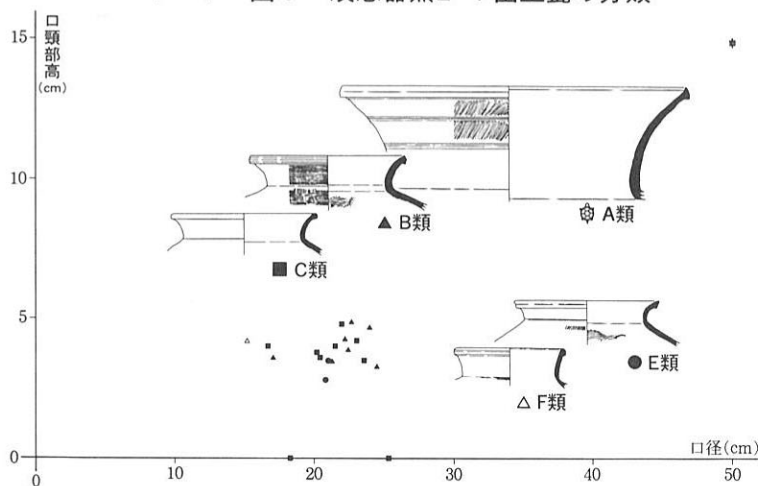
一方、蓋杯の技法の特徴による分類作業については後項で個別具体的な検討を加えることにしたい。なお、本稿において細分作業を行ったもの以外の須恵器については基本的に先学によって規定された器種分類および呼称を用いる。

a. 口縁部形態による甕の分類

出土須恵器の観察および数量化を行うにあたって、その前提作業として須恵器甕の口縁部形態を基軸



V-1-図3 須恵器窯L-1出土甕の分類



V-1-図4 須恵器窯L-1出土甕口縁部の法量分布

として分類した(図3)。紙幅の関係もあり、その具体的内容についてはここでは触れず、全体の傾向のみを略述しておく。

当窯から出土した須恵器甕はその口径からは直径50cm前後を測る大型の甕と直径20cm前後を測る甕とに大きく2分することが可能であり、後者の一群ではさらに細分される可能性をもつが、計測した資料が少ないので留保する(図4)。

とくに大型の甕は口縁形態でA類(細部の特徴で2種に細分)としたものが該当し、後者には複数の口縁形態を有する甕が存在する。ここでは個々の記述は控えるが、大型の甕はA類としたもののみで構成され、口縁部外面を2条の凹線によって3段に区画し、斜線紋を有するものである。また、直径20cm前後の一群では複数に分類が可能であるが、カキメ以外には何ら紋様をもたない甕が大勢を占めている。ただし、C類は

玉縁状の口縁端部の形態をもつものであるが、単純に丸くおさめるものをC-1類、強いナデ調整によって面を生じているものをC-2類とした。

b. 製作技法による須恵器蓋杯の分類

須恵器窯L-1出土の須恵器中においてその大半を占めている蓋杯は、形態面ではきわめて普遍的なものであるが、技法的特徴では留意すべき点が多い。

出土した蓋杯では特徴的な技法をもたない普遍的なものも圧倒的に多いが、外面にヘラ記号を有するもの、内面に同心円紋スタンプを有するもの、杯蓋では口縁端部外面に刻み目状の調整を施すものが、少量ながらも確認され、当該期の須恵器生産を検討する上では軽視できないものである。その分類と細分については図6に示した通りであり、ここでは簡潔に要点のみをまとめておく。

同心円紋スタンプを有する蓋杯 古墳時代を中心として須恵器蓋杯の内面に同心円紋スタンプの押捺が行われているものが存在することはすでに周知されている。筆者は過去に兵庫県明石市鴨谷池遺跡出土の須恵器の報告に際して蓋杯内面に残る同心円紋スタンプを検討する機会を得、不十分ではあったが全国的な集成作業を経て分析を行った⁷⁾。その結果、蓋杯内面に残る同心円紋スタンプは内面中心部付近に1回もしくは2回の押捺を行うもの(A類)と押圧範囲が広範でしかもその回数が多いもの(B類)とする分類を提示し(図5)、その製作技術についても言及した。

なお、当窯から出土した蓋杯内面に残る同心円紋スタンプは、その多くが中心部付近に2回の押捺を行うものであり、先の分類のA類に該当する。

ヘラ記号を有する蓋杯 須恵器窯L-1において出土した蓋杯のうちヘラ記号を有するものは破片数にして600点を超えている。ここでは図6に示したA類～H類の8種類のヘラ記号を確認している。分類の基準については図に示した通りであり、ここでは詳述しない。

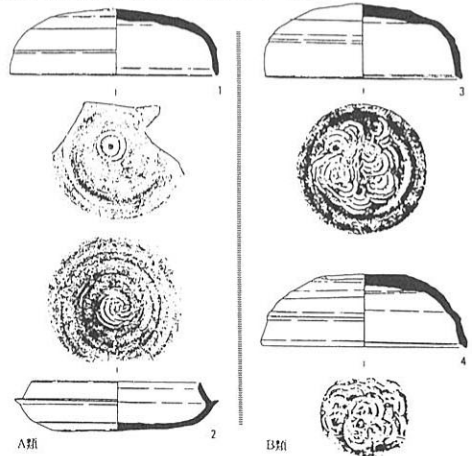
全体的傾向としてはA類が多く、これにD類、B類、H類、C類が続いている。

なお、後述する須恵器窯P-1出土蓋杯のヘラ記号では、すべての資料を網羅的に観察したわけではないが、A類、B類、C類、D類、G類の他、須恵器窯L-1では確認できない鳥足形のヘラ記号を有する一群(I類)が出土している。

須恵器窯L-1の場合においてはヘラ記号をもつ蓋杯はいずれも灰原からの出土であり、遺構との関係を把握するには至らないが、須恵器窯P-1では窯体内において複数のヘラ記号をもつ蓋杯の一群がまとまって出土しており、ヘラ記号の意味を考える上で重要な調査所見をもたらしている。

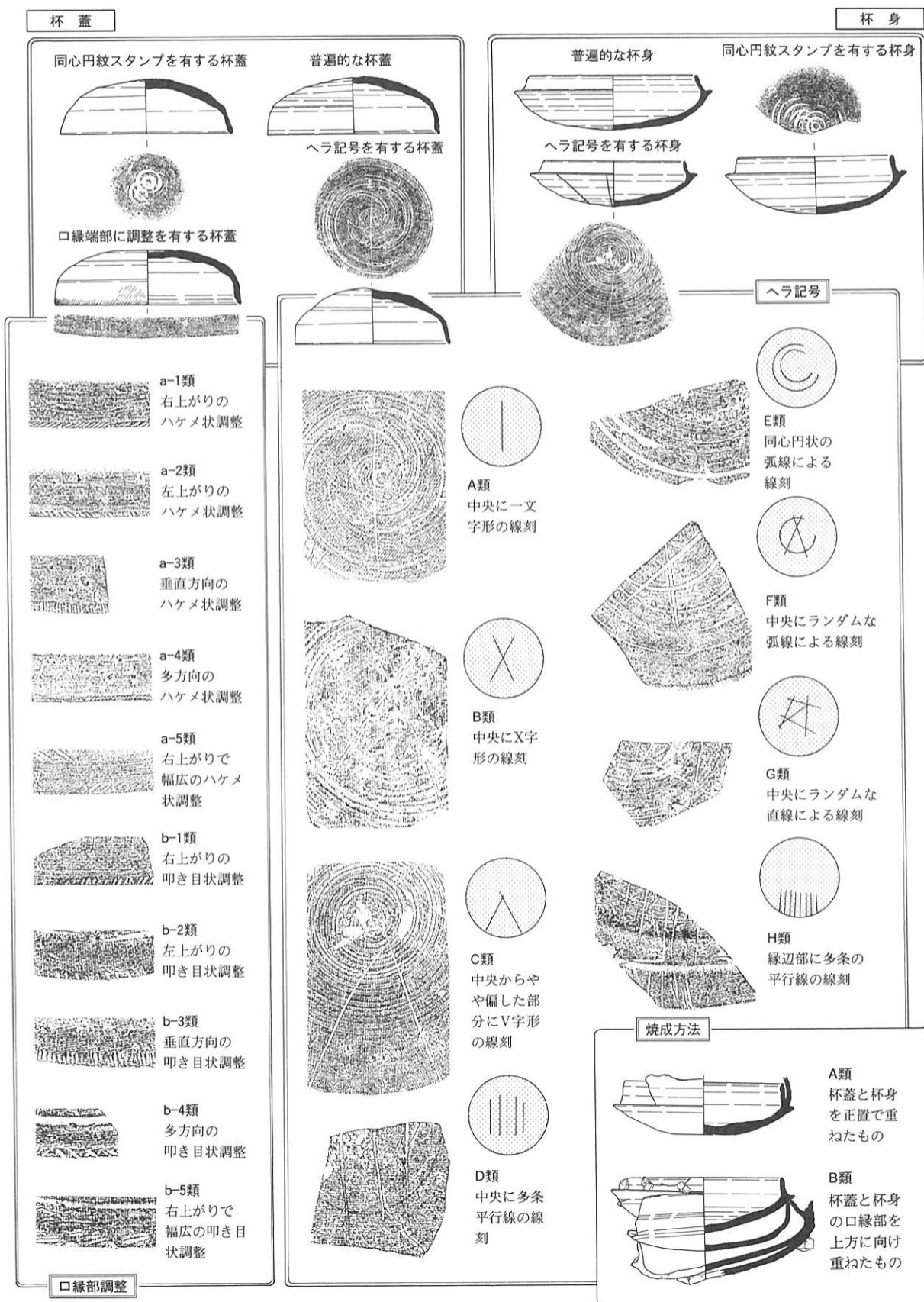
口縁端部に刻み目状の調整を有する杯蓋 須恵器窯L-1から出土した杯蓋にはわずかであるが、口縁端部外面に刻み目状の調整を施したものが確認される。

この調整は例外なく杯蓋の口縁部外面に限定されており、杯身口縁部に施されることはない。なお、この調整は細部の特徴から口縁を上方に向けた一次成形の段階になされたもので可能性が高い。出土点数は300点弱であり、蓋杯全体からみると少量である。しかしながら、調整技法は多様であり、大別してハケ調整に類似する技法によって残されたもの(a類)と叩き調整に類似する技法によって残されたもの(b類)に分類される。その内訳をみるとa類とb類の出土比率は10:1前後でa類が



V-1-図5

蓋杯の同心円紋スタンプ(註19所収)



V-1-図6 須恵器窯L-1 出土蓋杯の属性分類

圧倒的に多い。大勢を占めるa類を刻み目の方向を基軸として細分し、これをそのままb類にも適用している。ただし、この細分については必ずしも有意な分類とはいえないが、製作工人の同定にあたっては意味をもつものであると考える。

c. 焼成方法による須恵器蓋杯の分類

須恵器窯という性格上、出土した須恵器の中には溶着資料も少なからず含まれている。とくに溶着資料のうち、蓋杯を見ると杯身に杯蓋をかぶせた合口の状態で焼成しているもの（A類）と、杯蓋・杯身に関わらず口縁部を一定方向に向けて重ねて焼成されたもの（B類）に分かれることが確認できる。ちなみに須恵器窯L-1ではB類で焼成された蓋杯が多く、Ⅳ調査区で検出された須恵器窯P-1の床面Ⅰから検出した蓋杯ではA類の焼成方法が大勢を占めていることが看取される。

C 須恵器窯L-1出土須恵器の数量的検討

須恵器窯L-1に関連して出土した須恵器は先に示した分類を基軸として、そのすべてを対象に観察を加え、破片数、重量、口縁残存度のカウントを行った。その結果は表2～4に掲げた通りである。

なお、前提となる計測方法を以下に略述しておく。

破片数の計測は、個々の破片を1点と数え、接合資料においても接合した破片の一つずつをカウントした。また、重量の計測は最少目盛り5gの秤を使用して、10g以下を四捨五入し、10gを最少単位とした。なお、計測に際しては遺構ないしは登録番号単位で同一器種複数個を同時に計量することを基本とし、1点ごとの個別計量は行っていない。

口縁残存度は須恵器の口径に応じた複数の同心円とそれを放射状に32等分した作業台を用いて行い、1～32までの数値で表記し、それを加算している。また、それ以下の数値については目測による四捨五入を行っている。表4に示した数値はこの方法によるものであり、口縁残存度32をもって計算上の1個体であることを示している。

以下では、器種構成などの検討を具体的に行っていくが、1基の須恵器窯における出土量や器種構成の検討のためにいたずらに紙幅を費やすことを避け、時期的あるいは異なる地域の須恵器窯との比較検討を通じて、時期的、地域的な須恵器生産について検討を行うことにしたい。

なお、小阪遺跡H地区須恵器窯灰原出土資料（以下、小阪須恵器窯と略称）にはTK216型式からTK10型式までの3時期の須恵器が含まれることが報告されており、その結果、2基以上の窯体の存在が指摘されている⁸⁾。なお、出土資料の数量計測についての詳細は報告に記されている通り、すべての出土資料を対象としたものではなく、統計的手法に基づいて任意に抽出した242コンテナを対象としたものである。時期幅をもった複数の須恵器窯によって形成された灰原であるという状況を考えると報告中で提示された数量的なデータの扱いも慎重にならざるをえないが、ここでは須恵器窯L-1に先行する須恵器窯における器種構成を比較するための参考資料として俎上にあげる。

また、桜井谷窯跡群2-17窯跡（以下、桜井谷2-17と略称）については2時期にわたる操業が確認されており、第1次窯がTK10型式の新しい段階からTK43型式であり、第2次窯は一部で第1次窯と重複する時期の遺物を含んでTK209型式までの須恵器を含んでいる⁹⁾。したがって、当該窯は須恵器窯L-1の造営年代と重なりながらもやや新しい段階まで存続する須恵器窯といえる。陶邑とは異なる生産体制の中に位置する須恵器窯との比較からその類似点と相違点の検討を可能な限り行ってみたい。

a. 破片数（表2）

破片数は全体で36,935点を数え、その68.5%を蓋杯、29.8%を甕が占めている。それに対して、左記

の器種以外の高杯・甕・器台・壺・提瓶・横瓶・鉢・高杯蓋・壺蓋は合計しても2%に満たない数値となっている。一部で壺類の胴部や有蓋高杯の杯部をそれぞれ甕、蓋杯としてカウントしていることがあるなどといった点を考慮しても、その誤差はわずかなものと推測する。

なお、小阪須恵器窯をみると蓋杯が56.1%で過半数を占め、甕が25.1%で続くという点では共通するが、須恵器窯L-1では僅かであった他の器種が18.8%と5分の1近くを占めている点で相違する。

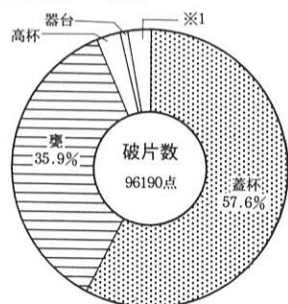
また、桜井谷2-17における破片計測データをもとに作成したグラフをみると総数96,190点に対して、蓋杯の占める割合が57.6%、甕が35.9%であり、両者が9割以上を占めるという点で須恵器窯L-1に近似した状況が看取される。ここでは重量ならびに口縁残存度による計測は行われていないが、破片数による器種構成比率が須恵器窯L-1に近似している点は留意される。間接的ではあるものの器種構成の実態を須恵器窯L-1の検討によって類推できる可能性をも示唆している。

b. 重量 (表3)

出土した須恵器は総重量941.45kgをはかり、当然の結果として個体重量が他器種を大きく凌駕する甕類が50.8%という値を示し、46.1%の蓋杯を超えている。この場合においても他器種の占める割合は僅少であり、わずか3%を占めるにすぎない。

なお、小阪須恵器窯では重量比においても甕が4分の1前後と、破片数での構成比と大きく変化していないが、これは甕の破片一片当たりの重量が須恵器窯L-1のものの2倍近い重量を有していることに起因している。したがって、基本的に破砕した状態で出土することが多い甕の場合においては、破片の大きさが多様であり、全体の器種構成を推定する上においては優位なデータとはなりえないようである。

桜井谷窯跡群2-17窯跡



※1 壺・瓶類・鉢・甕・高杯蓋・壺蓋・脚台・陶棺・不明

V-1-図7

桜井谷2-17窯跡の器種構成

V-1-表1 同心円紋スタンプ集計表

遺構 器種	床面 II	土坑 L-34	土坑 L-35	土坑 L-36	溝 L-12	灰原	合計
杯蓋	2	13	7	8	1	3	34
杯身		8	3	1		3	15
蓋杯不明	2	27	15	7	5	63	119
高杯						6	6
高杯蓋						4	4
総計	4	48	25	16	6	79	178

V-1-表2 須恵器窯L-1出土須恵器の破片数集計表

器種	技法的特徴	床面I	床面II	土坑L-34	土坑L-35	土坑L-36	溝L-12	前庭部	燃焼部	灰原	合計
杯蓋	通常口縁部		56	381	282	106	164	6		3148	4143
	通常天井部		22	118	33	3	76	1	2	1280	1535
	口縁刻み目		2	31	11	1	10			240	295
	同心円紋スタンプ		2	13	7	8	1		0	3	34
	ヘラ記号			40	17	12	1		1	20	91
	溶着資料		2	42	11					19	74
	合計	0	84	625	381	130	252	7	3	4710	6172
杯身	通常口縁部	1	20	255	181	76	77	6		1742	2358
	通常底部		22	110	115	23	106	5		1928	2309
	同心円紋スタンプ			8	3	1				3	15
	ヘラ記号			8	8	6	3	1		23	49
	溶着資料		2	19	14					21	56
	合計	1	44	400	321	106	186	12	0	3717	4787
	蓋杯不明		131	569	484	139	365	7	2	12048	13745
蓋杯不明 資料	ヘラ記号		4	11	13	8	18			426	480
	同心円紋スタンプ		2	27	15	7	5			63	119
	合計	0	137	607	512	154	388	7	2	12537	14344
	無蓋高杯			1						9	10
高杯	有蓋高杯		1							3	4
	長岡胴部		1	22	5		1			171	200
	短岡胴部			1	1					7	10
	合計	0	2	24	6	1	1	0	0	190	224
高杯蓋	口縁部										0
	つまみ			1			1			14	16
	合計	0	0	1	0	0	1	0	0	14	16
甕	口縁部			2	7					7	16
	胴部			2		1				23	26
	合計	0	0	4	7	1	0	0	0	30	42
器台	合計	0	2	0	1	0	0	0	0	5	8
	短頸壺				5						5
	直口壺				4					1	5
壺	広口壺		1		1	1	1			15	19
	合計	0	1	0	10	1	1	0	0	16	29
壺蓋	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
	口縁部			1	1	1				4	7
	胴部		2	8	21	14	2			136	183
提瓶	合計	0	2	9	22	15	2	0	0	140	190
	横瓶		0	0	1	0	17	0	0	0	18
	鉢		0	5	12	13	7	5	0	41	83
甕	A-1類			2						57	59
	A-2類			2						15	17
	B類					6		4	1	14	25
	C-1類		1	9	20	1				169	200
	C-2類			1		3				1	5
	D類									9	9
	E類					1				12	13
	F類									9	9
	その他									11	11
	胴部		16	323	258	409	187	1	1	9476	10671
	合計	0	17	337	284	414	191	2	1	9773	11019
総計		1	294	2020	1537	848	1027	28	6	31176	36935

c. 口縁残存度

口縁残存度の計測については先に記したような方法を用いており、残存度32をもって計算上の1個体としている。すでに記してきたように破片数、重量ともに破片の大きさに左右されやすいが、それに対して口縁残存度による個体数推定は存在していた最少個体の数量を推測する上においては最も有効な方法といえる。ただ、器種によっては口縁部を全く遺存しないものもあるが、全体からすれば、こういった資料はごくわずかである。したがって、大勢を占めている蓋杯と甕、さらにはそれ以外の器種との構成比を検証する上においては大きな影響を与えるものではないといえる。

ちなみに須恵器窯L-1における口縁残存度からみた器種構成をみると蓋杯が91.9%で全体の9割以上を占め、甕が6.0%、それ以外の器種は1.9%にすぎない。

須恵器窯の灰原出土須恵器という資料上の制約を考慮する必要はあるものの、その数は数万点を超えるものであり、そこで生産されていた須恵器の器種構成比の実態をかなり反映しているものであると判断する。陶器窯跡群の中心部からはやや距離をおいてはいるが、陶器窯跡群周辺地域における6世紀後半代の須恵器生産の具体相を示す基礎データとして提示しうるものとする。

また、同様に陶器窯跡群の周辺地域に位置し、日置荘遺跡の須恵器窯L-1からは東南東約4kmに位置する小阪遺跡と比較しておくことにしたい。

小阪須恵器窯灰原出土の須恵器の口縁残存度による器種構成をみると蓋杯が65.3%で過半を占める点は共通するが、甕は9.1%と少なく、10.1%を占める高杯を下回っている。個々の比較は避けるが、全体として甕の構成比にはさほど大きな差がないも

V-1-表3 須恵器窯L-1出土須恵器の重量集計表

器種	技法的特徴	床面I	床面II	土坑L-34	土坑L-35	土坑L-36	溝L-12	前庭部	燃焼部	灰原	合計
杯蓋	通常口縁部		860	14280	9690	7190	1700	220		33180	67100
	通常天井部		210	3260	1360	530	1310	160	50	17870	24750
	口縁刻み目		10	1030	550	10	190			3200	4990
	同心円紋スリッ		140	1770	460	240	60			110	2780
	ヘラ記号			3080	1920	930	20		100	1390	7440
	合計	0	1220	23400	13980	8900	3280	380	150	55750	107060
杯身	通常口縁部	330	220	14320	10040	5460	2340	440		30700	63850
	通常底部		180	2060	1450	460	1290	260		22870	28570
	同心円紋スリッ			2100	1440	210				480	4230
	ヘラ記号			2760	1220	810	90	60		740	5680
	合計	330	400	21240	14150	6940	3720	760	0	54790	102330
蓋杯不明資料	通常形態		1100	14650	7720	4350	5780	460	60	173490	207610
	ヘラ記号		40	560	150	490	480			9950	11670
	同心円紋スリッ		120	290	190	380	230			4350	5560
	合計	0	1260	15500	8060	5220	6490	460	60	187790	224840
高杯	無蓋高杯			60						210	270
	有蓋高杯		100							320	420
	長脚部		10	600	340		10			2340	3300
	短脚部			200	10	300				480	990
	合計	0	110	860	350	300	10	0	0	3350	4980
高杯蓋	口縁部										0
	つまみ			20			40			500	560
	合計	0	0	20	0	0	40	0	0	500	560
甕	口縁			20	440					80	540
	胴部			510		80				250	840
	合計	0	0	530	440	80	0	0	0	330	1380
器台	合計	0	130	0	740	0	0	0	0	130	1000
甕	短頸甕				680						680
	直口甕				60					10	70
	広口甕		20		20	300	50			970	1360
	合計	0	20	0	760	300	50	0	0	980	2110
甕蓋	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	50	50
提瓶	口縁			1520	200	830				360	2910
	胴部		40	680	2110	1210	30			4590	8660
	合計	0	40	2200	2310	2040	30	0	0	4950	11570
横瓶	合計	0	0	290	0	1170	0	0	0	0	1460
鉢	合計	0	340	1420	2450	0	80	0	0	1850	6140
甕	A-1類			480						7320	7800
	A-2類			360						900	1260
	B類				760		70	80		640	1550
	C-1類		90	450	2790	460				7380	11170
	口縁部			150		1620				30	1800
	D類									560	560
	E類					520				940	1460
	F類									200	200
	その他									1230	1230
	胴部		500	19970	7030	46060	6420	220	20	370720	450940
	合計	0	590	21410	10580	48660	6490	300	20	389920	477970
総計		330	4110	86870	53820	73610	20190	1900	230	700390	941450

V-1-表4 須恵器窯L-1出土須恵器の口縁残存度集計表

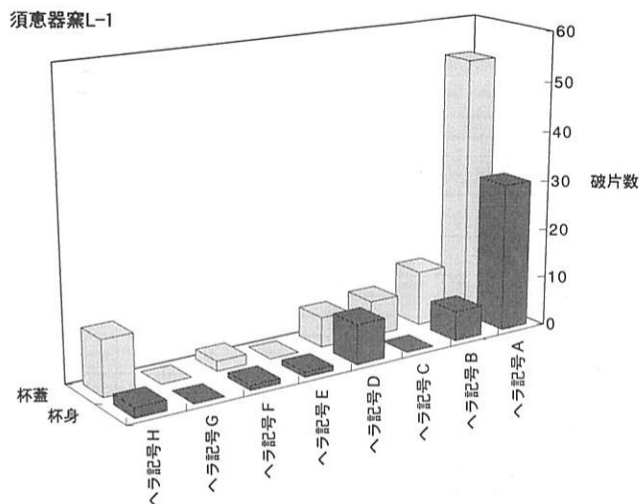
器種	技法的特徴	床面I	床面II	土坑L-34	土坑L-35	土坑L-36	溝L-12	前庭部	燃焼部	灰原	合計	推定個体数
杯蓋	通常口縁部		141	1536	998	675	371	28		6689	10438	
	口縁刻み目		5	125	58	4	41	4		643	880	
	同心円紋スリッ		8	66	21					1	96	
	ヘラ記号			116	88	33	1		8	82	328	
	消磨資料			164	103					100	367	
	合計	0	154	2007	1268	712	413	32	8	7515	12109	378.41
杯身	通常口縁部	32	49	1272	966	449	269	41		4339	7417	
	同心円紋スリッ			4	36	16				10	66	
	ヘラ記号			172	68	72	6			58	376	
	消磨資料			235	157					32	424	
	合計	32	49	1683	1227	537	275	41	0	4439	8263	258.64
高杯	無蓋高杯			2						16	18	
	有蓋高杯		7							10	17	
	合計	0	7	2	0	0	0	0	0	26	35	1.09
甕	合計	0	0	7	35	0	0	0	0	23	65	2.03
器台	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	6	6	0.19
甕	短頸甕				34						34	
	直口甕				5					13	18	
	広口甕		2		8		6			69	85	
	合計	0	2	0	47	0	6	0	0	82	137	4.28
提瓶	合計	0	0	32	32	32	0	0	0	34	130	4.06
横瓶	合計	0	0	32	0	0	0	0	0	0	32	1.00
鉢	合計	0	1	17	32	0	2	0	0	21	73	2.28
甕	A-1類			9						163	172	
	A-2類			12						31	43	
	B類				70		6	4		44	124	
	C-1類		6	47	117	30				537	737	
	C-2類			4		70				1	75	
	D類									15	15	
	E類					20				57	77	
	F類									52	52	
	その他			1						30	31	
	合計	0	6	73	187	120	6	4	0	930	1326	41.44
総計		32	219	3853	2828	1401	702	77	8	13076	22196	693.62

の、高杯・壺などの器種がほぼ4分の1を占めている点で須恵器窯L-1における須恵器器種構成比に顕著な相違点を見いだすことができる。

先述の通り、当該須恵器窯は須恵器窯L-1にやや先行する時期を中心とするものであり、ここでの器種構成の相違は年代的に異なる須恵器生産の特質を顕在化したものであると考える。

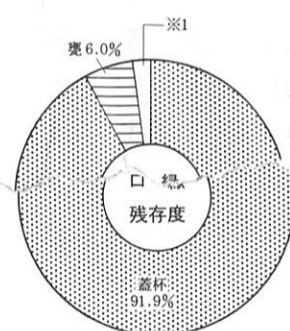
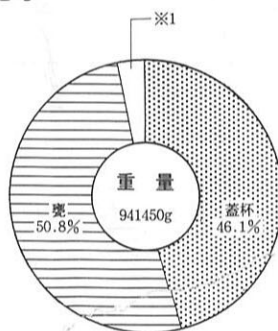
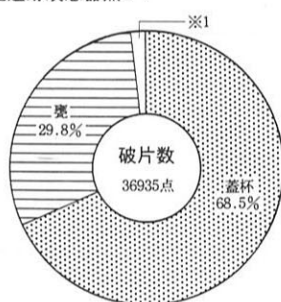
d. 数量的検討の展望

以上、破片数・重量・口縁残存度という3種の異なる方法によって須恵器窯L-1出土須恵器の数量的検討を行い、すでにデータが提示されている堺市小阪須恵器窯と桜井谷2-17窯跡との比較を行った。結果的に破片数、重量に器種構成比では何らの加工も行わな



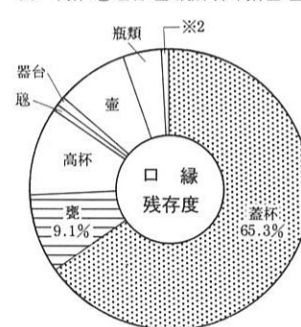
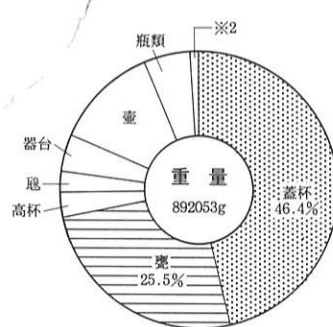
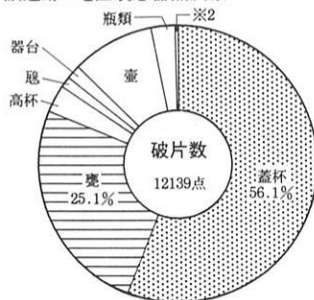
V-1-図8 蓋杯のへら記号

日置荘遺跡須恵器窯L-1



※1 高杯・壺・器台・壺・瓶類・鉢・高杯蓋・壺蓋

小阪遺跡H地区須恵器窯灰原



※2 鉢・瓶

V-1-図9 須恵器窯L-1と小阪須恵器窯出土須恵器の器種構成

V-1-表5 蓋杯のへら記号集計表

器種	へら記号	床面	土坑	土坑	土坑	溝	前庭部	焼部	灰原	合計
杯蓋	A類		26	7	8	1		1	10	53
	B類		8		2				1	11
	C類		1	4	2					7
	D類		2						4	6
	E類									0
	F類		1						1	2
	G類									0
	H類		2	5					4	11
杯身	A類		4	7	4	1			14	30
	B類		2		1	1			2	6
	C類									0
	D類		1	1	1	1	1		4	9
	E類								1	1
	F類		1							1
	G類									0
	H類								2	2
不明	A類	4	3	7	4	14			286	318
	B類		2		2	1			42	47
	C類		2		1				7	10
	D類		3	1	1				63	68
	E類					1			6	7
	F類		1						11	12
	G類					1			10	11
	H類			5					1	6
総計		4	59	37	26	21	1	1	469	618

いデータの提示では誤差が大きく、最少個体数の推定による器種構成比の検討には口縁残存度の計測が最も有効な手段となっている。

しかしながら、破片数および重量の計測が全く無意味なことであるかというそうではない。桜井谷2-17窯跡では出土した須恵器のように破片数の計測データのみが提示されているものもあり、これが先述のように日置荘須恵器窯L-1における破片数による器種構成比と近似した状況を示しているのである。このことは間接的ではあるものの、最少個体数の構成比も近似したものであった可能性を示唆している。

現段階では一般化できるものではないが、参考程度に日置荘須恵器窯L-1および小阪須恵器窯出土の須恵器蓋杯および甕の破片数と口縁残存度によって推定される個体数との関係を示す。なお、須恵器窯L-1の灰原は本文中にも記したように一部2次的に自然流路に流出して細かく破砕しており、ここでは比較的原位置を保って出土した土坑L-34、35、36、溝L-12出土資料を対象として、小阪須恵器窯と比較するのが妥当と考え、上記の遺構出土資料のみを抽出して合計している。

須恵器窯L-1 蓋杯破片数 4,144点——→推定個体数253.81点

甕破片数 1,226点——→推定個体数 12.06点

小阪須恵器窯 蓋杯破片数 6,816点——→推定個体数511.3点

甕破片数 3,044点——→推定個体数 71.6点

上記の関係をみると須恵器窯L-1では、計算上においては1点の蓋杯は平均して16.3片に破砕していることになる。一方の小阪須恵器窯では13.3片をもって計算上の1個体となっている。

同様のことを甕でみると前者では1個体当たり101.7片、後者では42.5片と倍以上の開きを生じている。甕の場合、個体の大きさなどに左右されやすく、破片の大きさが一律ではないという事実を追認させられる。それに対して、蓋杯の場合には時期的に若干の形態差はあるとはいえ、法量に大差はなく、1個体当たりの平均的な破片数は比較的近い数値を示している。

先にも記したように、わずかな資料のみの検討でもあり、現段階では一般化しうるものではないが、蓋杯に限って言えば、破片数に一定の係数を乗することによって、推定個体数をある程度まで絞り込むことが可能であるともいえる。

上記の2例のみで平均化することには無理があるが、須恵器窯L-1の場合では蓋杯破片数に0.061を乗すると推定個体数となり、小阪須恵器窯の場合、0.075を乗することによって推定個体数の値となる。したがって、現状では確度の高い係数を提示することはできないが、須恵器窯の灰原出土資料の場合、蓋杯破片数に0.061から0.075を前後する数値を乗することによって得られた答えが個体数に近似した数値であるといえる。

残念ながら、甕の場合には破片であっても個体ごとの法量の格差が破片・重量に大きな影響を及ぼしており、破片数のみの計測による器種構成比では、実際の個体数をはるかに上回る比率を占めることが多く、目先の数値に惑わされて実像を見失う結果となる。破片数比・重量比による単純な器種構成比の算出は控えねばならない。

D 須恵器窯L-1出土須恵器の技法的特徴

以上、須恵器窯L-1出土須恵器の数量計測を基軸として、他遺跡の須恵器窯との比較検討を行った。わずかな類例をもって一般化することはできないが、今後、須恵器生産の地域的・時代的特性を解明する上で器種構成や生産量の推定は重要な基礎材料となるものと考えられる。

しかし、これ以外に生産された須恵器にみられる製作上の技法的特徴も、須恵器生産の地域性・時代

的特質を考える上で重要かつ不可欠な要素といえる。

ここでは、当窯跡から出土している須恵器のうちでも最も出土点数が多く、しかも顕著な技法的特徴を有している蓋杯を組上にあげて検討を行うことにしたい。なお、蓋杯のうちでも特筆すべき技法的特徴を有するものについては、前提となる分類作業の過程でその特徴を一瞥しておいた。ここでは、個別具体的に技法的特徴についてみていくことにしたい。なお、以下では須恵器窯L-1を基軸として記述を進めるが、技法的特徴に類似するものが多いⅣ調査区の須恵器窯P-1出土須恵器との比較検討もあわせて行うことにする。

a. ヘラ記号を有する蓋杯の検討

須恵器窯L-1からはヘラ記号を有する蓋杯が、破片数にして620点出土しており、その一覧は表5に示している。ただ、これらの中には破片資料も多数含まれており、部分的に残存していた場合には先に示した分類中のいずれに該当するかを判断するのが困難な場合も多い。しかも、細片の場合ではヘラ記号の全容を知りうることは困難であり、細片で1条の線刻のみが確認される場合には、いずれもA類としている。細片での出土が多い、灰原資料においてA類が多いのはこのような状況に起因しており、これが必ずしも実態を示しているものではないことを明記しておく。

しかしながら、完形品を含む残存状態の良好な資料のみをピックアップした場合においても先に示した8種類のヘラ記号の存在は確実であり、A類が他類を凌駕することも事実である。

上記のように当窯出土須恵器蓋杯に残るヘラ記号はその絶対数にはやや問題を残すものの、その傾向を示すと、A類・B類・D類が多く、それにH類およびC類が続くという状況を示している。なお、表5には遺構別の出土点数も示しているが、いずれにしても灰原を構成する遺構からの出土であり、特筆すべき状況を見いだすことはできない。

それに対してⅣ調査区の須恵器窯P-1では窯体の床面Ⅰからは厳密には原位置を保ってはいないものの、同一ヘラ記号をもつ杯身・杯蓋がセットで、しかもまとまって焼成されていた可能性が明らかとなっている。これはヘラ記号のもつ意味を考える上において非常に重要な情報を提供しているものであり、この点については後述する。

b. 同心円紋スタンプを有する蓋杯の製作技法

蓋杯の内面に残る同心円紋スタンプについてはすでに多くの先学が注目し、その検討を行っている。基本的に蓋杯製作技術の一工程の痕跡を示すものとして捉えるという点では共通しているが、その痕跡がいかなる過程で残されたものかという点に至っては必ずしも見解は一致していない。

この問題については過去に検討を加えたものがあるので、ここでは詳述しないが、これまでの見解を一瞥すると、おおむね以下ようになる。

同心円紋当て具シッタ代用痕跡説（田辺昭三・植野浩三・八賀 晋）

田辺氏は蓋杯内面に残る同心円紋当て具の痕跡がヘラ削りのシッタの代わりとして同心円紋当て具を利用した結果、生じた痕跡であるとする¹⁰⁾。加えて、粘土紐を巻き上げて作成した粗形を同心円紋当て具で押圧してロクロ盤上に固定して、回転ナデをはじめとするロクロ成形を行った際の痕跡である可能性を指摘している。時期的には仕上げ工程の省略の著しい6世紀以降の蓋杯にその痕跡を残すものが多いことを指摘する。

植野氏は同心円紋スタンプの痕跡を残す蓋杯について、より詳細な検討を行い、その痕跡が杯身・杯蓋の外面のヘラ削りの際にシッタの代用として用いられた同心円紋当て具によるものであるとし、基本

的に田辺説を支持している¹¹⁾。時期的にはTK47型式の段階に出現し、TK43型式の段階に消滅することを指摘する。

八賀氏も基本的には田辺・植野両氏の説と同様にシッタの代用として同心円紋当て具を用いた結果、生じた痕跡であるとする¹²⁾。

同心円紋当て具内面平滑痕跡説（中村 浩）

中村氏は須恵器の製作復元実験を踏まえた上で、蓋杯内面に残る同心円紋スタンプの痕跡を蓋杯内面に施される仕上げナデの手法と同様に、ロクロ調整後の中心部に残る粘土の高まりを調整するためのものとする¹³⁾。

粘土板・粘土紐ロクロ上固定痕跡説（白石耕治）

白石氏は陶邑窯跡群谷山池地区の窯跡群の調査によって出土した須恵器蓋杯の観察を通して、同心円紋スタンプが回転ナデに先行するものとし、植野氏らの指摘するシッタ代用説に対して否定的な見解を提示する¹⁴⁾。すなわち、蓋杯内面に残る同心円紋スタンプ痕は粘土板・粘土紐などをロクロ上に固定するための押圧の痕跡であるとし、これによって蓋杯の粘土塊水挽き技法を否定するに至っている。

蓋杯外面叩き技法当て具説ほか多種多様技法痕跡説（江浦 洋）

筆者は明石市鴨谷池遺跡において検出された須恵器窯灰原出土資料中検討の際、同心円紋スタンプを有する蓋杯の外面に叩き調整を施したものが少なからず存在することに着目し、同心円紋スタンプの押捺が叩き調整の際の当て具によって生じたものも存在する可能性を指摘した¹⁵⁾。また、これと同時に地域性と時代性を考証すべく全国150箇所前後の遺跡から出土した類例資料の集成を行った。その結果、兵庫県相生市小丸古墳群1号墳・3号墳出土の杯蓋¹⁶⁾、福岡県福岡市広石古墳群Ⅲ-1号墳北側流路出土の杯身¹⁷⁾、京都府園部町曾我谷遺跡旧河道出土の杯身¹⁸⁾等では、内面には同心円紋スタンプが観察されるのに対して外面はいずれも回転ヘラ削りを施さないものが存在することを確認した。このような類例の存在は、蓋杯内面の同心円紋スタンプがヘラ削りの際に用いられた同心円紋当て具によって生じた痕跡であるとする見方と、先に記した叩き調整の際の当て具の痕跡であるとする見方のいずれをも否定することとなる。また、筆者の管見によれば、白石氏の指摘するような事例はむしろ少数派である可能性が高く、同心円紋スタンプが回転ナデを切る事例が大勢を占めるものと判断する。とくに、すべての出土資料を観察した須恵器窯L-1に関していえば、すべての資料において例外なく回転ナデ調整の後に同心円紋スタンプが押圧されている。

また、同心円紋スタンプを残す須恵器では蓋杯のみならず、高杯や高杯蓋にも見られるなど、脚部やつまみを接合する際、口縁端部を保護するために同心円紋当て具を用いた可能性も考え、蓋杯の同心円紋スタンプについては単一の技法の痕跡として一律に捉えることは困難であり、多種多様な技法の痕跡として残されたものである可能性が高いものと判断している。

もちろん、この場合においては地域差、時期差を考慮すべきことは自明の事実であり、同一時期、同一地域においても工人間で相違が存在していることも考慮すべき問題であるといえる。

しかしながら、須恵器窯L-1出土蓋杯に限ってみれば、本文中においても記したように蓋杯に残る同心円紋スタンプはいずれも中心部付近とやや場所をずらして2回の押捺を行うという点が共通しており、これは同心円紋スタンプの押捺の意味を考える上で重要な所見であるといえる。

また、Ⅳ調査区の須恵器窯P-1の窯体床面の一括資料ではヘラ記号と同心円紋スタンプの押捺に相関関係があり、工人によって同心円紋スタンプの押捺を行うグループと行わないグループの存在が示唆

される点は重要である。この事実は須恵器窯L-1出土の須恵器群においても同様であり、同心円紋スタンプを有する蓋杯は蓋杯全体の1%（口縁残存度）に満たない数値を示すのみである。

逆にいえば、このような事実は同心円紋スタンプの押捺が蓋杯の製作過程において必要不可欠な技法であった可能性を否定するものでもある。しかし、成形途上において何らかの変形が生じた須恵器のみにこの同心円紋スタンプの押捺が行われたという可能性も否定できないが、当該痕跡を有する蓋杯とその痕跡をまったく認めない蓋杯には形態面での明確な差は認め難いのも事実である。

あるいは、ヘラ記号と同様に製作工程とは何らの関係もなく押捺された場合の存在も可能性として考慮しておく必要があるのかもしれない。

ここでは、明解な回答を用意することはできないが、上記のような所見から須恵器窯L-1出土の同心円紋スタンプを有する蓋杯に限っていえば、シッタの代用や叩き調整の当て具などといった製作工程上において押捺された可能性はきわめて低いものと判断せざるをえない状況であるといえる。

c. 口縁端部に刻み目状調整を有する杯蓋の検討

これまでに記してきたように口縁端部に刻み目状の調整を有する杯蓋が少なからず出土する点も須恵器窯L-1の特徴である。この点についても概要報告の段階において分類を行い、この調整が杯蓋に限定されていることから「口縁部の成形に関してこの技法が不可欠なものであったとは考えることができない」と考え、「成形技法の一工程であると考えよりは、むしろ装飾的な意味をもって成された」ものとしている¹⁹⁾。

今回の検討においては、出土した全資料から該当する須恵器蓋杯をすべて観察したが、当窯の場合においては例外なく杯蓋のみに見られる特徴であった。

ただし、1点ずつではあるが、土師遺跡SD014出土杯身²⁰⁾、丈六大池遺跡SK104出土碗²¹⁾の実測図には口縁部外面に刻み目状調整が表現されている。大局的には杯蓋や高杯蓋をはじめとする蓋類の口縁部に特徴的な技法であるということは揺るぎないが、「杯蓋をはじめとする蓋に限定的な技法であり、装飾的な意味をもつ」とした概要報告段階の見解には訂正の必要があろう。

なお、後述するように須恵器窯P-1から出土した須恵器には形状などの特徴から同一工人が製作したと考えられる2つの須恵器杯蓋の一方にのみ口縁刻み目が認められることが明らかとなっており、先に示した同心円紋スタンプと同様に杯蓋の調整技法として必要不可欠なものであった可能性が低いことを示唆している。このことは、口縁部に刻み目状の調整を有する蓋杯が全体の1割に満たないという事実とも呼応している。

結果的に口縁端部を対象として臨機に行われる特徴的な成形技法の一種として認識しておくことが穏当であると考えられる。ただし、現段階において当該技法がどのような状況下で残されたものであるのか、という点については説得力のある見解を提示しえない。

しかしながら、このような特徴をもつ蓋杯等を生産していた須恵器窯は陶邑窯跡群においても確認できるが、むしろその北側と東側に展開する周辺地域に分布が集中している点が看取される。

また、消費地では一須賀古墳群のように、かなりの比率で当該特徴を有する蓋類が出土するものが確認される点は示唆的であり、当該期の須恵器生産における需要と供給の関係を検討する手掛かりとしてはかなり有効な特徴であるといえる（表6）。

この点については、最後に須恵器窯P-1において出土している異形杯²²⁾を含めて検討を行うので、ここでは略述するにとどめる。

V-1-表6 大阪府下における口縁端部に刻み目状調整を有する須恵器一覧表

所在地	遺跡名	性格	出土遺構	器種	文 献
豊中市	桜井谷窯跡群	生産地	2-17窯跡排水溝	杯蓋	『桜井谷窯跡群2-17窯跡』 1982 小路窯跡遺跡調査団
堺市	陶器窯跡群	生産地	TK44-1号窯	杯蓋	『陶器Ⅴ』 1982 財大阪文化財センター
			MT85号窯跡	杯蓋	『須恵器大成』 1981 角川書店
			TK217号窯跡	杯蓋	『須恵器大成』 1981 角川書店
	日置荘遺跡	生産地	須恵器窯L-1	杯蓋	本書
			須恵器窯P-1	杯蓋	
	日置荘西町遺跡	生産地	須恵器窯1・2灰原	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』第32冊 1992 堺市教育委員会
			須恵器窯灰原	杯蓋	『堺市文化財調査報告』第52集 1991 堺市教育委員会
	深井畑山窯跡群	生産地	第1号窯 灰原	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』第47冊 1994 堺市教育委員会
	丈六大池遺跡	生産地	C-2地区 灰原	杯蓋・高杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』第3冊 1990 堺市教育委員会
			C-2地区 SK051	杯蓋	
			C-2地区 SK080	杯蓋	
			C-2地区 SK104	碗	
			C-2地区 SK124	杯蓋	
大阪狭山市	今熊1号窯	生産地	第1次焼成床面	杯蓋	『大阪狭山市遺跡群発掘調査概要報告書』4 1994 大阪狭山市教育委員会
	池尻新池南窯	生産地	焼成部攪乱坑	杯蓋	
松原市	樋野ヶ池窯跡	生産地	中層灰原	杯蓋	『池尻新池南窯発掘調査報告書』 1992 大阪狭山市教育委員会
堺市	陶器南遺跡	消費地	包含層	杯蓋	『三宅遺跡』 1980 松原市教育委員会
	陶器・小角田遺跡	消費地	SK155	杯蓋	『陶器千塚発掘調査概要Ⅲ』 1994 大阪府教育委員会
	陶器・大庭寺遺跡	消費地	375 OS	杯蓋	『堺市文化財調査報告』第33集 1988 堺市教育委員会
	土師遺跡	消費地	SD015	杯蓋	『陶器・大庭寺遺跡Ⅱ』 1990 大阪府教育委員会・財大阪府埋蔵文化財協会
			B地区包含層	杯蓋	『堺市文化財調査報告』第36集 1988 堺市教育委員会
			SD014	杯身	『堺市文化財調査報告』第50集 1990 堺市教育委員会
			埋没谷	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』第27冊 1992 堺市教育委員会
			SAE28	杯蓋	
	深井瀬池遺跡	消費地	自然河川	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』第47冊 1994 堺市教育委員会
	東上野芝遺跡	消費地	SK005	杯蓋	『堺市文化財調査報告』第10集 1982 堺市教育委員会
			包含層	杯蓋	
	新金岡更池遺跡	消費地	包含層	杯蓋	未報告 1993年度 大阪文化財センター調査
堺市・松原市	大和川今池遺跡	消費地	SD28	杯蓋	『大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅴ』 1988 大阪府教育委員会
			SK55	杯蓋	
美原町	太井遺跡	消費地	Pit17	杯蓋	『太井遺跡発掘調査概要』 1989 大阪府教育委員会
			包含層	杯蓋	
柏原市	高井田横穴群	消費地	3・11号墳	杯蓋	『高井田横穴群Ⅳ』 1992 柏原市教育委員会
	大黒遺跡	消費地	溝・1	杯蓋	『柏原市所在遺跡発掘調査概要 1983年度』1984 柏原市教育委員会
			溝・2	杯蓋	
富田林市	喜志西遺跡	消費地	包含層(第6層)	杯蓋	『喜志西遺跡発掘調査Ⅲ』 1994 大阪府教育委員会
	中野遺跡	消費地	溝12	高杯蓋	『中野遺跡発掘調査概要Ⅱ』 1983 大阪府教育委員会
河南町・太子町	一須賀古墳群	消費地	A9号墳	壺蓋	『一須賀古墳群資料目録Ⅰ 土器編(実測図)』 1992 大阪府教育委員会
			B3号墳	杯蓋	
			D5号墳	杯蓋	
			O4号墳	杯蓋	
			WA7号墳	杯蓋	
			WA12号墳	杯蓋	
			WA14号墳	高杯蓋	
			WA21号墳	杯蓋	
	一須賀・葉室古墳群	消費地	I-7号墳	杯蓋	『一須賀古墳群Ⅰ文群発掘調査概要』 1993 大阪府教育委員会
			O-4号墳	杯蓋	『一須賀・葉室古墳群-葉室地区の調査-』 1984年 大阪府教育委員会
			A-9号墳	壺蓋	
	神山丑神遺跡	消費地	3号墳	杯蓋	『神山丑神遺跡発掘調査概要』 1992 大阪府教育委員会
			6号墳	杯蓋	
			SX02	杯蓋	
河南町	寛弘寺遺跡	消費地	31号墳	杯蓋	『寛弘寺遺跡発掘調査概要Ⅴ』 1987 大阪府教育委員会
			42号墳	高杯蓋	
河内長野市	三日月遺跡	消費地	SK114	杯蓋	『三日月遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 1988 三日月遺跡調査会
	烏帽子形城	消費地	10号墳周溝	高杯蓋	『三日月遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1994 三日月遺跡調査会
大阪市	城山遺跡	消費地	堅穴住居2	杯蓋	『河内長野市遺跡調査会報Ⅱ』 1990 河内長野市遺跡調査会
	久宝寺遺跡	消費地	SP-01	杯蓋	『城山遺跡(その3)』 1986 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター
八尾市	久宝寺遺跡	消費地	NR-1	杯蓋	『八尾市文化財調査研究会年報』 1987 八尾市文化財調査研究会
			NR2001(自然流路)	杯蓋	『久宝寺北(その1~3)』 1987 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター
	亀井遺跡	消費地	包含層(第Ⅶ層)	杯蓋	『亀井』 1983 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター
	亀井北遺跡	消費地	古墳時代第4遺構面	杯蓋	『亀井北(その2)』 1986 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター
	美園遺跡	消費地	C地区古墳時代中後期包含層	杯蓋	『美園』 1985 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター

第3節 IV調査区須恵器窯P-1の基礎的検討

1. 遺構の概要と分析の前提

須恵器窯P-1は、IV調査区P地区で検出した開析谷の西側に造営されており、南側にある埴輪窯P-1とは約17mの距離を隔てている。

また、当該窯の北側で行った堺市教育委員会の調査では、複数の須恵器窯跡と埴輪窯跡が確認されている。

当該須恵器窯は燃焼部と焼成部の一部を残すのみで、遺存状態はかならずしも良好とはいえないが、確認された2面の床面のうちの床面Ⅰからは、ほぼ原位置を保った状態の須恵器を検出している。

とくに床面Ⅰからは異なるヘラ記号をもつ蓋杯が一定の規則性をもって検出されており、窯詰め段階における工人グループ間の床面の占有関係の状況を看取することが可能である。

床面Ⅰから検出した須恵器については後述するが、それ以外に前面の谷部に展開する灰原からはコンテナにして300杯の須恵器が出土している。灰原出土資料については数量的な検討等は加えられていないが、蓋杯が過半数を占めており、そのほかの器種では甕と短頸壺が目立つようである。

なお、当該窯に関しては筆者は調査担当外であることに加えて、時間的制約から出土資料を十分に検討することはできない。したがって、以下では比較的良好な状態で出土した一括性の高い床面Ⅰの須恵器群を限定的に分析の対象としていることをあらかじめ断っておく。

また、床面Ⅰにおいて検出した須恵器は、調査段階においていずれも個別に番号を付して取り上げられているが、不幸にしてそれを記載した図面が行方不明となっている。今回の分析では概要報告および調査時に撮影された写真と実物とを照合することから作業をはじめ、遺物のほとんどを特定することができた。しかし、誠に遺憾ながらD類のヘラ記号をもつ蓋杯などは最後までその出土位置を明確にすることができず、結果的に以下の分析対象としては、一級資料から除外せざるをえない状況となった。

なお、以下の分析では須恵器窯L-1で行った数量的検討を当該窯にも適用し、さらにはヘラ記号と細部の製作技法および法量の検討によって陶工とそのグループを抽出し、須恵器生産工人集団の構造把握のための一助とする。

2. 須恵器窯P-1床面Ⅰ出土遺物の基礎分析

先記のように当該窯出土の須恵器としては一括性の高い床面Ⅰ出土資料のみを検討の対象とする。

床面Ⅰからは破片数にして1,237点、重量にして264.16kgの須恵器が出土している。出土した須恵器にはヘラ記号によって工人の特定が可能な資料も含まれており、そのすべてを観察してデータ化を行った。

なお、観察のポイントおよびそれに基づく分類については基本的に須恵器窯L-1出土資料の分析作業と大きく異なるものではないので、ここでは省略する。

A 床面Ⅰ出土須恵器の器種構成

床面Ⅰから出土した須恵器は、蓋杯・甕・高杯蓋・壺蓋・甕である。窯体の遺存状態がかならずしも良好とはいえないという点を勘案しても、図10に示したようにバラエティーに富んだ器種構成を示す灰原出土資料との差は歴然としている。

灰原出土資料を含めた器種構成は、当該期の須恵器窯の様相と大きくかわるものではないが、直径20cmをこえる大型の蓋杯が2点出土しているほか、皿状を呈する異形杯が出土している。次項では床面Ⅰ

を対象とした分析を行うので、灰原から出土した異形杯については、ここで略述しておく。

a. 異形杯の検討

須恵器窯P-1 灰原出土の異形杯は図10の上段に示したものである。形状は杯身の立ち上がり部分を欠いたような皿状を呈する。外面には回転ヘラ削り、底部内面中央には一定方向ナデが施される。基本的な成形、調整は杯身の底体部の造作と共通している。ただし、口縁部の内面部分は回転ヘラ削り調整である。

立ち上がり部分を故意に削り取った杯身と解することも可能であるが、図10の中、下段に示したように一須賀古墳群²³⁾や高井田横穴群²⁴⁾などの消費地においても類似した形態を呈する須恵器が出土することから、当該形状をもって製品として条件を満たしていたものと判断する。

なお、この異形杯はきわめて希少な器種であるが故に、後述するように生産地と消費地の関係を類推する上で重要な手掛かりとなるものとする。

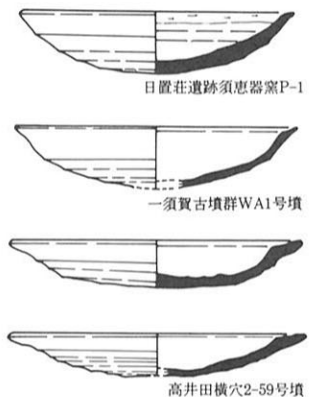
B 床面I出土須恵器の分類

当該須恵器窯出土資料については、分析の対象を床面I出土資料に限定したために灰原出土資料を含めた各器種毎の形態差などの検討は行っていない。

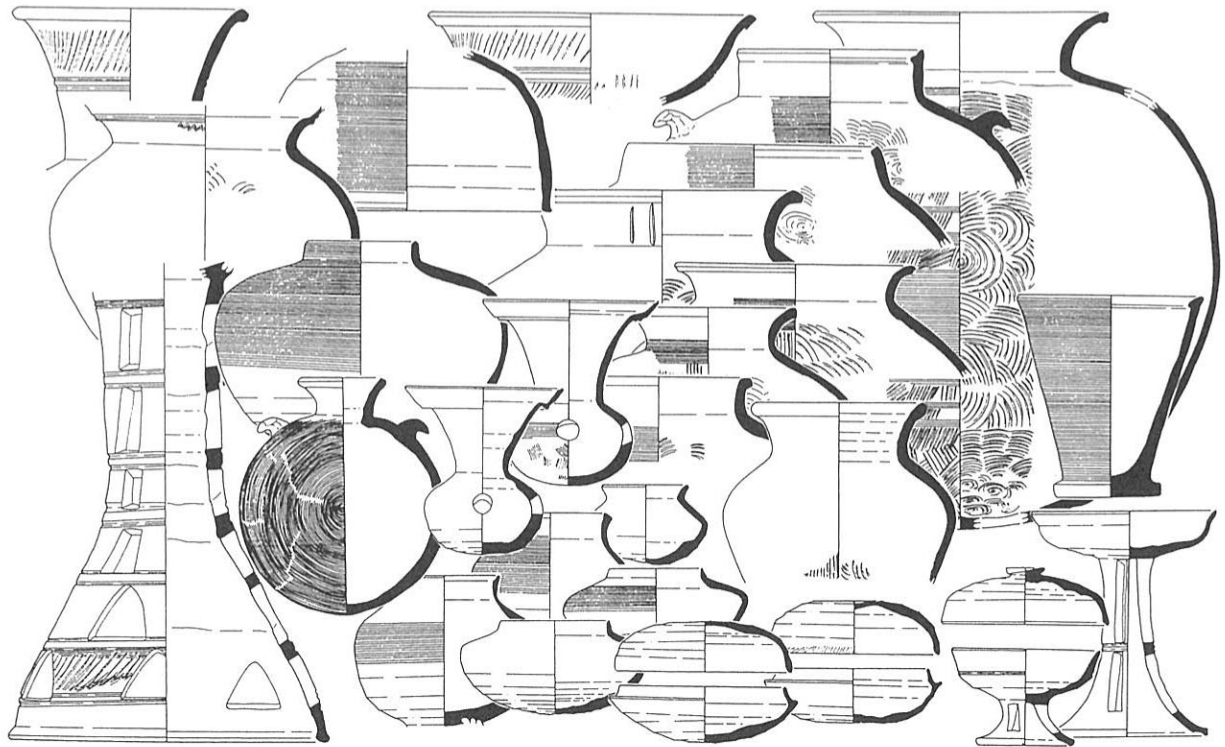
床面I出土須恵器は後述するように少量の甕などを除く大半が蓋杯であることを特徴としている。多くの部分で須恵器窯L-1と重複するが、とくに蓋杯に限って、製作技法について補足しておくことにしたい。

a. 製作技法による須恵器蓋杯の分類

蓋杯に残された痕跡については須恵器窯L-1と共通する部分が多く、外面にヘラ記号を有するもの、内面に同心円紋スタンプを有するもの、杯



V-1-図10 異形杯
(各報告所収図を一部改変)



V-1-図11 須恵器窯P-1 出土須恵器の器種構成

蓋では口縁端部外面に刻み目状の調整を有するものが少量ながら確認される（図12）。大局的には図6に示した須恵器窯L-1出土蓋杯の属性分類と共通する部分が多いが、一部で異なる部分もみられるので略記しておくことにしたい。

同心円紋スタンプを有する蓋杯 当該窯から出土した蓋杯にみられる同心円紋スタンプは須恵器窯L-1と類似するものであり（A類）、そのほとんどが中心部付近に2回の押捺を行うものである。

ヘラ記号を有する蓋杯 当該窯出土の蓋杯にみられるヘラ記号は一部を除いて須恵器窯L-1と共通しており、その特徴については図6に示した通りである。ただし、当該窯ではE・F・H類は欠落しており、これに対して鳥足形（I類）のヘラ記号をもつ一群が確認できる。

また、これらのヘラ記号を有する蓋杯は、後述するように床面において一定の規則性をもった状態で出土している。

口縁端部に刻み目状の調整を有する蓋杯 須恵器窯L-1と同様にわずかではあるが、杯蓋の口縁端部に刻み目状の調整を施すものが認められる。ハケ調整に類似する技法によるもの（a類）と叩き調整に類似する技法（b類）の両者が確認できる点など、須恵器窯L-1の状況と酷似する。

b. 焼成方法による須恵器蓋杯の分類

須恵器窯L-1出土遺物の分析に際して、杯身に杯蓋をかぶせた状態で焼成したもの（A類）と杯身、杯蓋に関わらず、口縁部を上方にむけて重ねて焼成したもの（B類）に分類した。須恵器窯P-1床面Iから出土した蓋杯については、1点を除くすべてがA類による焼成方法をとっている。なお、すべて

を観察したわけではないが、灰原から出土したものには少なからずB類とした焼成方法をとったものも含まれている。

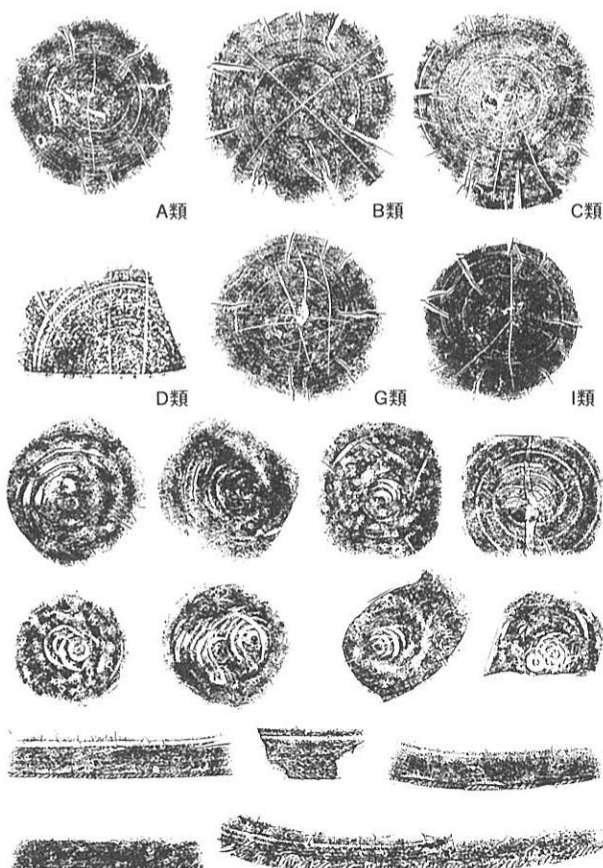
ただし、床面Iに限れば、最終的に残された蓋杯の焼成方法は明らかにA類に偏重しており、これは異なるヘラ記号をもった蓋杯が規則性をもって窯詰めされている状況と関連している可能性が高いものと考ええる。

C 床面I出土須恵器の数量的検討

須恵器窯P-1の床面Iから出土した須恵器は、上記の分類を基軸としてすべてを対象として観察を行い、破片数、重量、口縁残存度のカウントを行った（表7）。

ただし、先述の通り、当該窯においては床面の一部が遺存していたのみであり、以下に掲げる数値は、かならずしも一度に焼成されていた須恵器の全体像を示すものではないことを前提として認識しておく必要がある。

それぞれの計測方法については先述した須恵器窯L-1出土須恵器の計測方法と同様であり、こ



V-1-図12 須恵器窯P-1出土須恵器拓影

（上-ヘラ記号、中-内面同心円紋スタンプ、下-口縁端部刻み目）こでは省略する。

なお、灰原出土資料を含めた計測は行っていないが、その量は300コンテナ前後であり、須恵器窯L-1から出土した須恵器を凌駕している。

a. 破片数

床面Iから出土した須恵器は破片数で1,237点を数え、その94%を蓋杯、残りの6%を甕などで占めている。須恵器窯L-1の場合と同様に一部で有蓋高杯の杯部を蓋杯としてカウントしている可能性もある。しかし、床面I出土の須恵器の場合には高杯の脚部片が1点も含まれておらず、その可能性は低いものと判断される。したがって、破片数の計測においても全体に占める蓋杯の割合が圧倒的に多いということは明らかである。

窯体の一部が遺存していたのみであるとはいえ、灰原資料にみられるバラエティーに富んだ器種の破片すら認められない点は示唆的であり、蓋杯と少量の甕を限定的に窯詰めして焼成していた場合の存在をも示唆するものである。

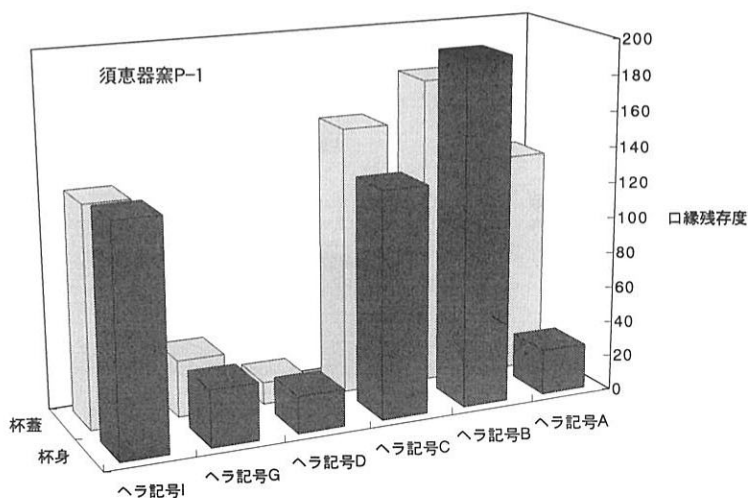
b. 重量

出土した須恵器の総重量は428.71kgを測るが、そのうちの95%を蓋杯が占めている。須恵器窯L-1および小阪須恵器窯における重量計測では1個体の重量で他器種を凌駕する甕が大きな部分を占めていたが、当該窯ではその数がきわめて少ないこともあって、破片数と同様に1割以下の数値を示しているにすぎない。

c. 口縁残存度

口縁残存度の計測については、先に記した方法を用いており、残存度32をもって計算上の1個体となる。器種構成をみると蓋杯が99%を占めており、その内訳は杯身が45%、杯蓋が55%であり、ほぼ均衡を保っている。したがって、甕などの他器種はあわせても1%であり、全体からすればわずかな部分を占めるのみである。

残念ながら、当該窯の場合は灰原出土資料の分析を行って



V-1-図13 蓋杯のへら記号

V-1-表7 須恵器窯P-1床面I
出土須恵器集計表

器種	技法の特徴	破片数	重量(g)	口縁残存	推定個体数
杯蓋	通常口縁部	309	75630	1170	
	通常天井部	26	5620		
	口縁刻み目a	7	5880	81.5	
	口縁刻み目b	8	2360	30.5	
	同心円紋スリッ	4	8620	69	
	へら記号A	9	15560	125.5	
	へら記号B	6	10660	113	
	へら記号C	4	10570	119	
	へら記号D	2	2280	12.5	
	へら記号G	1	2500	32	
	へら記号I	3	7920	96	
	へら記号不明	5	5910	72.5	
	へらB+スリッ	2	4540	64	
	へらC+スリッ	1	2600	32	
	へらI+刻み目b	2	5590	60.5	
合計		389	166240	2078	64.94
杯身	通常口縁部	144	96840	1025.5	
	通常底部	63	8660		
	同心円紋スリッ	5	9520	78	
	へら記号A	6	5800	25.5	
	へら記号B	5	10860	106	
	へら記号C	3	8310	96	
	へら記号D	2	2900	21	
	へら記号G	1	2660	32	
	へら記号I	4	10460	128	
	へら記号不明	3	4210	45	
	へらB+スリッ	3	7480	88.5	
	へらC+スリッ	1	2760	32	
	合計	240	170460	1677.5	52.42
不明蓋杯	通常破片	151	20690		
	同心円紋スリッ	6	2200		
	へら記号A	4	1680		
	へら記号B	0	0		
	へら記号C	2	480		
	へら記号D	1	40		
	へら記号G	2	500		
	へら記号I	0	0		
	へら記号H	1	280		
	へら記号不明	369	46450		
	へらG+スリッ	1	340		
	合計	537	72660		
高杯蓋	合計	1	500	0	0
	口縁部	3	260	7.5	
	胴部	46	7110	0	
甕	合計	49	7370	7.5	0.23
	合計	13	1490	14	0.44
溶着資料	合計	8	9990	34	1.63
	合計	1237	428710	3811	119.66

おらず、先に検討を行った小阪須恵器窯灰原出土資料および須恵器窯L-1出土資料との単純な比較はできない。

現状でみる限りにおいては、床面Ⅰの最終段階における須恵器の焼成は、蓋杯主体であった蓋然性が高いものであるといえる。ただし、灰原からは床面Ⅰにみられない多様な器種が出土していることは第Ⅳ部の報告に示された通りである。

結果として、当該窯では多様な須恵器が生産されていたにも関わらず、床面Ⅰに残された須恵器はその大半が蓋杯であるという事実が明らかとなった。

可能性としては、特定の器種毎を選定して焼成するような生産体制の存在が示唆されるとともに、さらには削平されて遺存していない部分において他器種が焼成されていたと考えた場合には、焼成部内において器種毎の置き分けが行われていたことになる。

筆者は前者の可能性が高いものと憶測するが、後者の可能性も無きにしも非ずである。

d. 数量的検討の展望

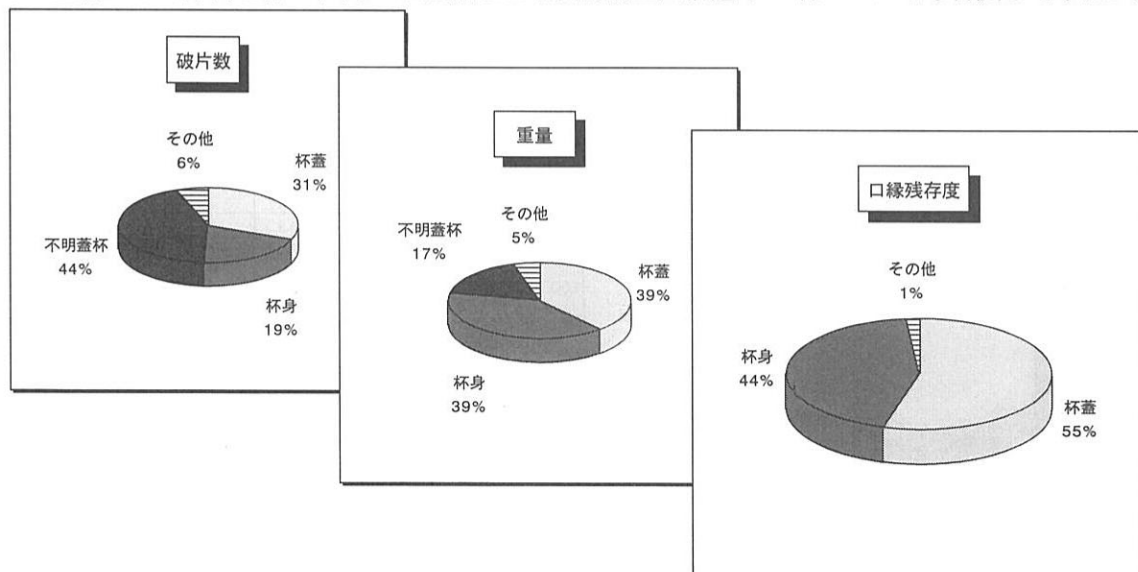
須恵器窯L-1の分析において、灰原出土資料における破片数と個体数の関係について検討を行った。しかしながら、これらはいくまでも灰原出土資料を対象として参考値を提示したものである。ちなみに、完形品を多く含む窯体内出土資料である須恵器窯P-1の場合、計算上、蓋杯1点は平均して9.9片前後に破碎していることになる。参考程度に数値を挙げておくならば、当該窯の床面Ⅰ出土資料では蓋杯破片数に0.101を乗することによって得られる値が蓋杯の最低個体数に近いものといえる。

当然の結果ではあるが、灰原出土資料と窯体内資料とでは、その状況に大きな差異があり、単純な比較は困難であるといえる。今後の資料の増加を待って、再考しなければならない課題である。

D 須恵器窯P-1 床面Ⅰと出土須恵器の検討

以上、須恵器窯P-1 床面Ⅰから出土した須恵器の数量計測を基軸として若干の検討を行った。結果として、床面Ⅰに残された須恵器はほぼ蓋杯に限られるということが明らかとなった。

したがって、以下の検討も須恵器窯L-1と同様に蓋杯を対象とする。なお、先述のように床面Ⅰ出土の須恵器は同一のヘラ記号を有する蓋杯が一定のまとまりをもって窯詰めされており、ここではヘラ記号を基軸として分析を行い、陶工の組織などの須恵器生産構造の一端についても言及してみたい。



V-1-図14 須恵器窯P-1 床面Ⅰ出土須恵器の器種構成

a. 出土状況

須恵器窯P-1床面Iから出土した須恵器蓋杯は完形のものが多く、厳密には原位置を保っているとはいえないものの、相対的な位置関係については、ほぼ当時の状況を物語っているものと考えている。とくに、埋没状況をみると、焼成部から燃焼部に向かって主軸方向、すなわち前後に平行移動している可能性は高いものの、左右方向への移動はきわめて低いものとする。

したがって、厳密には窯詰め時の原位置を保ってはいないものの、窯詰め段階の配置を検証することも可能であると判断する。

とくに、杯蓋と杯身は蓋と身をセットとして焼成することを基本としており、その多くにヘラ記号を施したものが多くという点が特徴的である。

その出土状況については図15に示した通りであり、これを一瞥しても分かるように同一のヘラ記号を有する蓋杯が一定のまとまりをもって整然と窯詰めされている状況を看取することが可能である。

さらにこれを詳細にみると、同一ヘラ記号を有する蓋杯は床面主軸に幅40～50cmの通路とともとれる空

V-1-表8 須恵器窯P-1床面I出土のヘラ記号蓋杯一覧表(図16, 17)

図 番号	分 類	器種	本報告 図番号	概 報 図番号	杯蓋 口径	杯身 口径	器高	杯身 受部径	底体部 高	口 縁 形 態	同心円 紋スタンプ	内面一定 方向ナデ	口縁 刻み	備 考
1	A-1群	杯蓋	未掲載	図33-24	14.8	—	4.4	—	—	内傾する凹面	なし	あり	なし	
2	A-1群	杯蓋	未掲載	図33-26	15.2	—	4.6	—	—	内傾する凹面	なし	あり	なし	
3	A-2群	杯蓋	未掲載	未掲載	13.2	—	3.7	—	—	内傾する凹面	なし	なし	あり	
4	A-2群	杯蓋	未掲載	図33-25	15.6	—	3.9	—	—	内傾する凹面	なし	なし	なし	
5	A-3群	杯蓋	図94-15	図34-5	14.0	—	4.0	—	—	内傾する段	なし	あり	なし	6とセット
6	A-3群	杯身	図94-16	図34-6	—	12.3	4.8	14.2	3.2	鋭い	なし	あり	—	5とセット
7	B-1群	杯蓋	図94-11	図31-4	14.0	—	4.0	—	—	丸い	あり	なし	なし	8とセット
8	B-1群	杯身	図94-12	図31-5	—	13.3	4.2	14.6	3.6	鋭い	あり	なし	—	7とセット
9	B-1群	杯蓋	図94-5	図34-14	13.7	—	4.2	—	—	丸い	あり	あり	なし	10とセット
10	B-1群	杯身	図94-6	図34-15	—	12.5	4.4	14.0	3.4	鋭い	あり	なし	—	9とセット
11	B-1群	杯蓋	図94-25	図31-2	14.6	—	4.5	—	—	丸い	なし	なし	なし	12とセット
12	B-1群	杯身	図94-26	図31-3	—	12.9	4.4	14.5	3.4	鋭い	なし	なし	—	11とセット
13	B-1群	杯蓋	未掲載	図31-1	13.6	—	4.2	—	—	丸い	なし	あり	なし	
14	B-3群	杯身	未掲載	未掲載	—	12.0	4.6	13.9	3.2	鋭い	なし	あり	—	
15	B-2群	杯身	未掲載	未掲載	—	13.0	4.5	15.3	3.1	鋭い	あり	あり	なし	27と重なる
16	D-1群	杯蓋	未掲載	未掲載	14.0	—	4.1	—	—	内傾する段	なし	あり	なし	
17	D-2群	杯蓋	未掲載	未掲載	14.4	—	4.5	—	—	丸い	なし	なし	なし	
18	D-2群	杯身	未掲載	未掲載	—	12.6	4.6	15.0	3.5	鋭い	なし	あり	—	
19	C-1群	杯蓋	図94-30	図32-14	14.4	—	3.5	—	—	観察不能	観察不能	観察不能	なし	20と溶着
20	C-1群	杯身	図94-30	図32-15	—	不明	不明	15.3	3.0	観察不能	観察不能	観察不能	—	19と溶着
21	C-1群	杯蓋	未掲載	図32-16	14.8	—	3.4	—	—	観察不能	観察不能	観察不能	なし	22と溶着
22	C-1群	杯身	未掲載	図32-17	—	不明	不明	15.2	2.9	観察不能	観察不能	観察不能	—	21と溶着
23	C-1群	杯蓋	図94-27	図32-20	14.5	—	3.7	—	—	内傾する凹面	あり	あり	なし	24とセット
24	C-1群	杯身	図94-28	図32-21	—	12.7	3.9	14.7	2.8	鋭い	あり	あり	—	23とセット
25	C-2群	杯蓋	図94-31	図32-18	15.6	—	3.5	—	—	観察不能	観察不能	観察不能	あり	26と溶着
26	C-2群	杯身	図94-31	図32-19	—	不明	不明	15.6	2.8	観察不能	観察不能	観察不能	—	25と溶着
27	C-3群	杯蓋	未掲載	図31-6	14.5	—	5.1	—	—	内傾する段	なし	あり	なし	15と重なる
28	I-1群	杯蓋	図94-17	図31-10	14.0	—	5.2	—	—	丸い	なし	あり	なし	29とセット
29	I-1群	杯身	図94-18	図31-11	—	12.6	4.0	14.4	3.2	鋭い	なし	あり	—	28とセット
30	I-1群	杯蓋	図94-9	図34-3	13.7	—	4.0	—	—	丸い	なし	あり	なし	31とセット
31	I-1群	杯身	図94-10	図34-4	—	12.6	4.2	14.1	2.9	鋭い	なし	あり	—	30とセット
32	I-2群	杯蓋	図94-23	図34-1	14.2	—	4.7	—	—	内傾する段	なし	あり	あり	33とセット
33	I-2群	杯身	図94-24	図34-2	—	11.8	4.5	14.2	3.3	鋭い	なし	なし	—	32とセット
34	I-3群	杯蓋	図94-7	図31-8	13.8	—	4.2	—	—	内傾する段	なし	あり	あり	35とセット
35	I-3群	杯身	図94-8	図31-9	—	12.2	4.3	13.3	3.4	鋭い	なし	あり	—	34とセット
36	I-3群	杯蓋	図94-29	図32-12	13.6	—	4.8	—	—	観察不能	観察不能	観察不能	なし	37と溶着
37	I-3群	杯身	図94-29	図32-13	—	不明	不明	14.2	3.5	観察不能	観察不能	観察不能	—	36と溶着
38	G-1群	杯蓋	図94-13	図32-22	13.8	—	4.5	—	—	内傾する段	なし	なし	なし	39とセット
39	G-1群	杯身	図94-14	図32-23	—	13.2	4.5	14.4	3.5	鋭い	なし	あり	—	38とセット

間を挟んで左右両側に一定のまとまりをもって窯詰めされている状況を看取することができる。ここでは、とくに蓋杯が集中して出土した部分を須恵器蓋杯のまとまりごとに4地区に分割し、それぞれの状況を概観しておくことにする。

N E区ではヘラ記号I類の蓋杯が完形で3セット（他に完形が2セットあるが、原位置不明）が出土しており、そのうちの2セットは近接し、1セットはやや距離を置いている。なお、これらはいずれも杯身を上にした状態で出土している。これ以外では西寄りではヘラ記号G類の蓋杯が完形で1セット出土しており、これも杯身を上にした状態を呈している。

このほか、ここからはヘラ記号A類の杯蓋が2点、無記号の蓋杯が数点出土しているが、いずれも破片ないしは一部を欠損しており、さらにはセットで焼成されたものも皆無である。

NW区ではヘラ記号B類の蓋杯が完形で3セット（他に完形が1セットあるが、原位置不明）が出土しており、うち2セットは近接するが、1セットはやや距離をおいている。なお、これらはN E区におけるヘラ記号I類の蓋杯と同様にいずれも杯身を上にした状態で出土している。

このほか、ヘラ記号A類やC類の杯蓋等が出土しているが、その多くは破片ないしは一部を欠損しており、さらにはセットで焼成された状況も見出し難いものである。

S E区ではヘラ記号C類の蓋杯が完形で4セットが近接して並んだ状態で出土している。そのうちの北端の1セットのみが杯身を上にして出土している以外はいずれも杯蓋を上になっている。その配列はやや円弧を描いており、さらに上下に重なった状態で出土した部分もあり、桜井谷窯跡群2-23号窯跡で検出された蓋杯の窯詰め方法に類似した状況を呈していた可能性も示唆される。

SW区では無記号の蓋杯が完形で2セット出土している。いずれも杯身を上にしており、S E区のヘラ記号C類蓋杯の3セット以外はすべてが杯身を上にする点が共通している。

ここからは他に蓋杯および甕の破片が出土しているが、完形およびセット焼成のものは見い出せない。

以上が床面Iにおける蓋杯の出土状況である。なお、当該床面から出土した須恵器蓋杯にはD類としたヘラ記号を有する蓋杯の破片が出土しているが、残念ながら原位置を特定することができない。

ただし、蓋と身がセットで焼成されていることが確実な完形品のみを一級資料とし、焼き台として転用されていた可能性もある破片資料を除外した場合、N E区にはI類、NW区にはB類、S E区にはC類、SW区からは無記号の蓋杯のみが出土しており、きわめて意図的な配置をとることが看取されるのである。

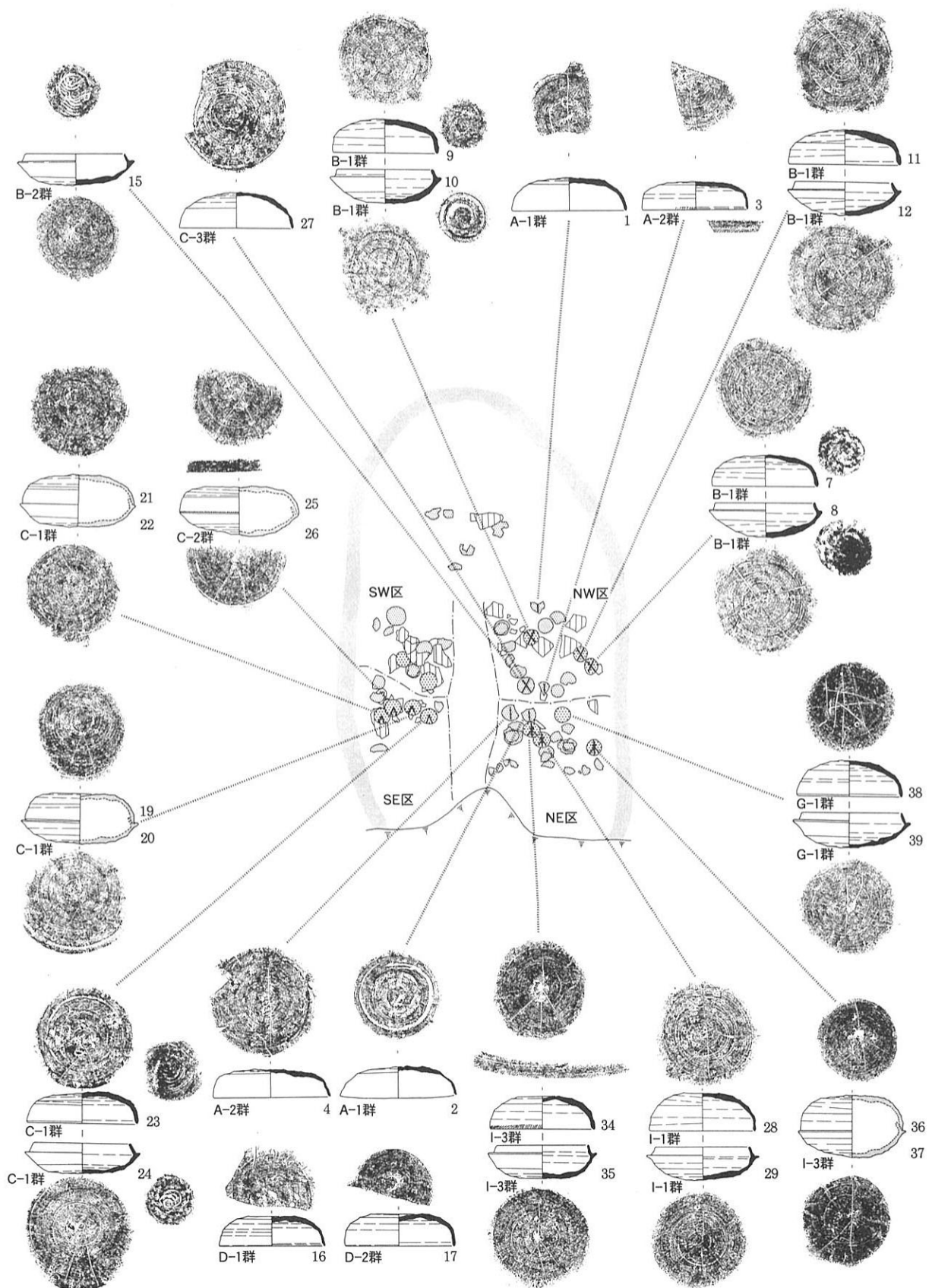
以上、蓋杯の出土状況から同一ヘラ記号を有する蓋杯が規則性をもって窯詰めされていた可能性が明らかとなった。ここで、一步進めて同一ヘラ記号を有する蓋杯が同一工人の手によるものか、あるいは同一工人グループによるものであるのかという問題を検証していくことにしたい。

b. ヘラ記号を有する蓋杯の検討

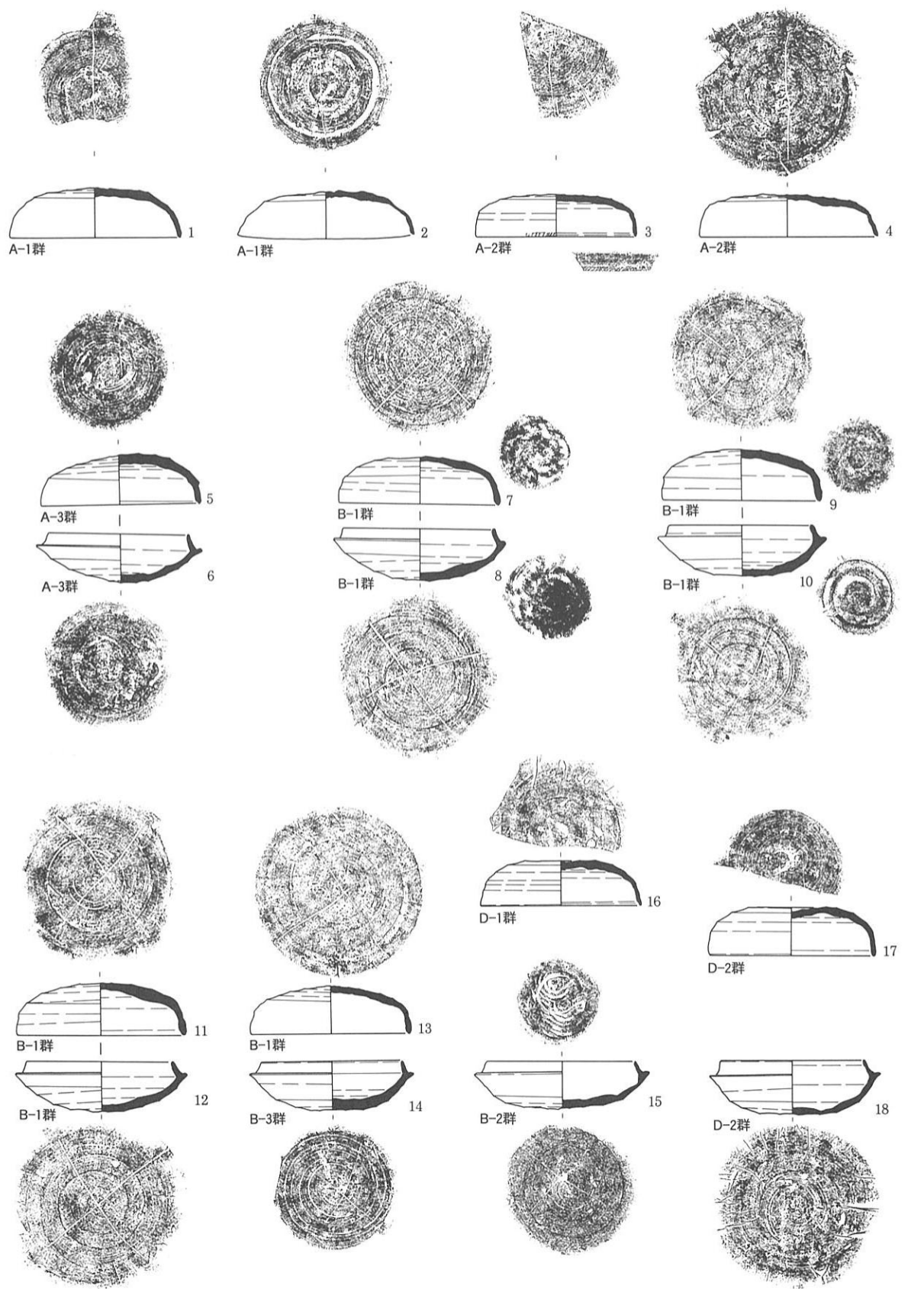
以下では同一ヘラ記号を有する蓋杯を組上にあげて、細部の技法的特徴等を検証し、可能な限り工人の実態にせまってみたい。

ただし、その前提としてヘラ記号を有する蓋杯のうちでも床面上における位置が特定できる資料を中心に検討を行うことにしたい。したがって、ヘラ記号D類は破片数にして5点の出土を確認しているものの原位置を特定できない資料であり、他の資料とは一線を画することとなる。

以下、分析の主たる対象とするのは表8に示した器形や技法的特徴を抽出することが可能な39点の蓋杯であるが、他の破片資料についても同様の観察作業を行っている。

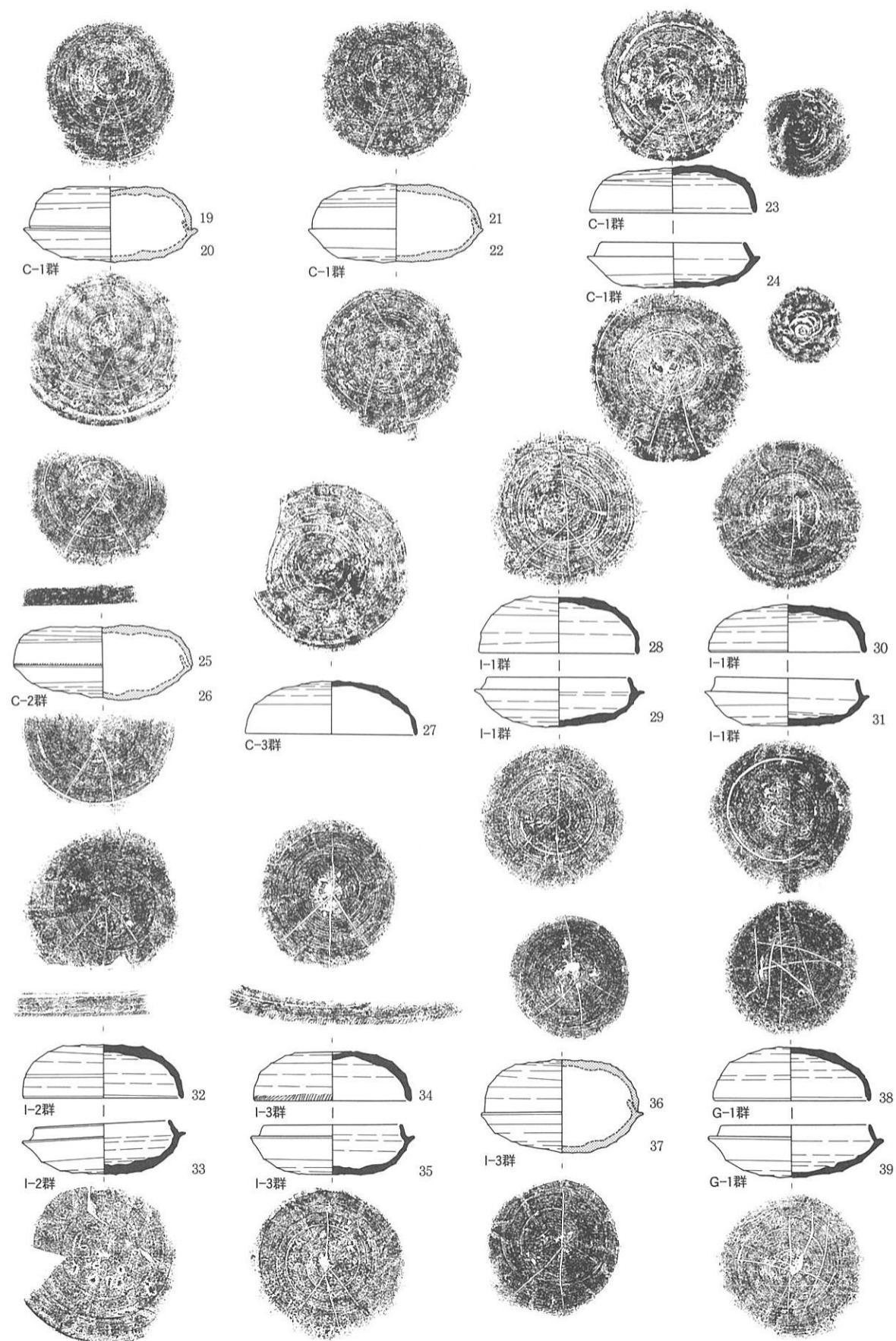


V-1-図15 須恵器窯P-1 床面I 須恵器出土状況



※杯蓋と杯身を線で結んだものはセット

V-1-図16 須恵器窯P-1 床面I 出土のヘラ記号蓋杯(1)



V-1-図17 須恵器窯P-1床面I出土のヘラ記号蓋杯(2)

分析にあたっては、全体の器形や口縁端部²⁵⁾などの形態的特徴のほか、内面の同心円紋スタンプの有無と当て具の異同、内面の一定方向ナデの有無および幅、杯蓋に関しては口縁端部の刻み目状調整の有無、ヘラ記号の筆順や施紋具の先端形状や幅などの属性を観察のポイントとして、実物を相互に比較した。表ではとくに、その特徴が顕著に表れる幾つかの項目のみを提示した。

なお、同一工人によって製作された蓋杯の同定に関しては上記の諸点を総合的に観察した結果に基づくものであり、かなり確度の高いものとするが、これらの属性については多分に主観的かつ恣意的な資料操作に陥るとのそしりも免れない。したがって、ここでは客観的データとして、杯蓋に関しては口径と器高、杯身に関しては受部径と底体部高の計測値を比較のためのデータとして採用した。なお、本来であれば、杯身の場合も杯蓋と同様に器高のデータが重要であると考えが、8点の資料で蓋と溶着しており、器高が不明であり、底体部高の計測値の比較を緩用している。

以下、ヘラ記号毎に蓋杯の特徴を簡潔に記述していくことにする。

A群 ヘラ記号A類をもつ蓋杯の一群である。杯蓋でみると全体的に半球状の器形を呈するA-1群（図16-1,2）と扁平な天井部をもつA-2群（3,4）、稜が比較的はっきりとしているA-3群（5）に細分される。5・6はセットであり、他群に比してヘラ記号が極端に短いという特徴をもつ。また、これらの法量をみると、各群はまとまってはいるが、他群とは抵触しないという状況を看取することができる。

したがって、ヘラ記号A類を有する蓋杯A群は3工人によって構成されていたものと判断される。なお、A群では内面の同心円紋スタンプはみられない。以下では、A類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループA」とする。

B群 ヘラ記号B類をもつ蓋杯の一群である。細部の比較検討により、セットで出土した蓋杯（7~12）は同一工人の手によるものであると判断する（B-1群）。とくに、これらの蓋杯では厚く丸い口縁端部が特徴的であり、しかも法量も1cm以内の僅差でまとまっており、容易に同工品と認定しうるものである。ただし、内面の同心円紋スタンプは7~10の2セットにのみ認められ、同一工人の手になる蓋杯でもその押捺がなされる場合となされない場合が存在していたことになる。ちなみに、これらの蓋杯に用いられた当て具は同一の工具であることが看取される。

そのほか、セットではないがB-2群、B-3群とした杯身が出土しており、先のB-1群とは細部の特徴が異なる。また、B-2群には内面に同心円紋スタンプが押捺されるが、その当て具はB-1群のものとは明瞭に異なっている。

したがって、ヘラ記号B類を有する蓋杯は、3工人によって生産されていたものと判断される。以下では、B類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループB」とする。

C群 ヘラ記号C類をもつ蓋杯の一群である。溶着資料を含むために細部不明の資料もあるが、器形や細部の特徴、さらには法量が僅差でまとまることなどから、セットで出土した蓋杯のうちの図17-19~24は同一工人の手によるものと判断される（C-1群）。ちなみに、C-1群ではヘラ記号の筆順がいずれも同一であることが確認できる。

そのほか、口径がやや大きく扁平な器形を有し、口縁に刻み目状の調整をもつC-2群、セットではないが、ヘラ記号が特徴的なC-3群を抽出することが可能である。

したがって、ヘラ記号C類を有する蓋杯は、A・B群と同様に3工人によって生産されていたものと判断される。以下では、C類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループC」とする。

D群 ヘラ記号D類をもつ蓋杯一群であるが、先述のように床面Ⅰに存在していたことは確かであるが、原位置は不明である。しかも、他群とは異なり、セットでの出土は認められないものである。

杯蓋では口縁端部の形態差によって細分することが可能であり、それぞれをD-1群(16)、D-2群(17)とした。なお、18の杯身は厳密にはいずれかとセットになるのか、あるいは別の群を構成するのかは不明であるが、力の無い浅いヘラ記号がきわめて酷似している点、法量の対応を評価してD-2群と判断している。ただし、これに関しては他群における工人の同定とは異なり、直接的根拠に欠ける。

以下では、D類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループD」とする。

G群 ヘラ記号G類をもつ蓋杯の一群である。完形の1セット(38,39)のほかに、破片2点出土している。破片資料はいずれも口縁端部が残存しておらず、完形資料と同一工人の手によるものか否かは、にわかに判断できない。ただし、当群は他例に比して出土点数が少ないのは明らかであり、ヘラ記号がきわめて複雑である点などを勘案するならば、1工人のみである可能性が高いものと判断する。

単独工人である可能性も高いが、以下では、G類のヘラ記号を用いる工人を「工人グループG」とする。

I群 鳥足形のヘラ記号であるI類をもつ蓋杯の一群である。

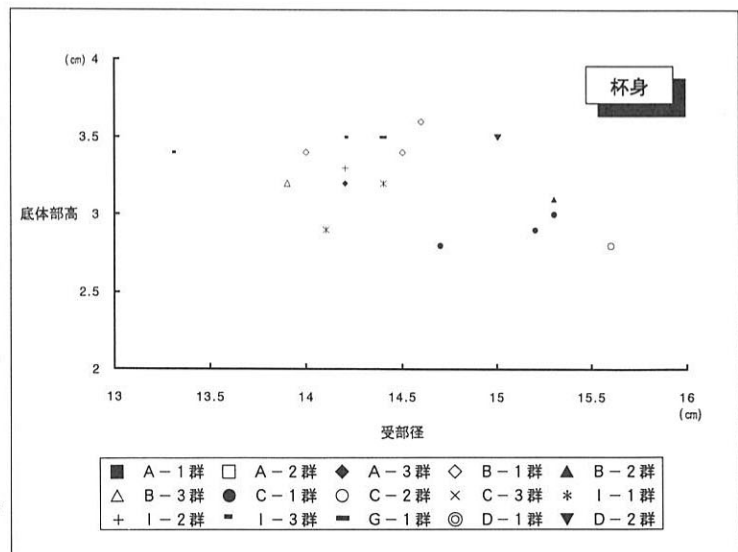
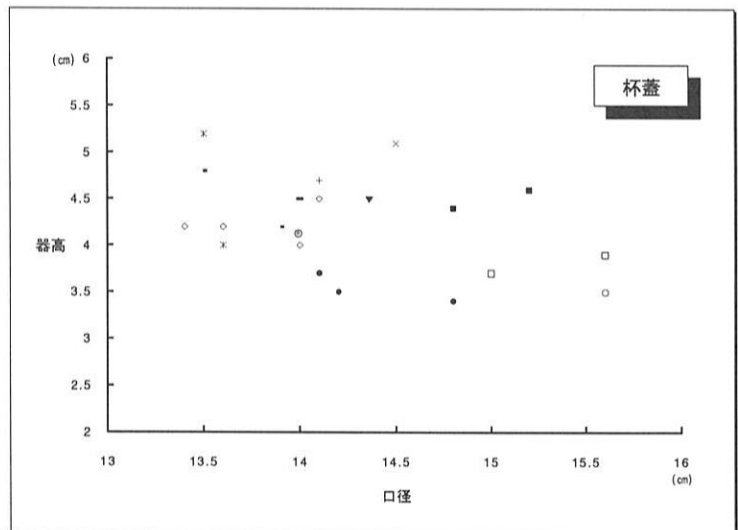
杯蓋での比較では口縁端部を丸く成形するI-1群(28,30)と内傾する段をもつI-2群(32)、I-3群(34)に細分が可能である。B群とともに全体にやや小振りな蓋杯であることを特徴とし、A群と同様に内面の同心円紋スタンプはまったく認められない。なお、ヘラ記号の筆順はすべてが同じである。

したがって、ヘラ記号I類を有する蓋杯は、A・B・C群と同様に3工人によって生産されていたものと判断される。

以下では、I類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループI」とする。

以上、同一ヘラ記号をもつ蓋杯を多角的に比較検討することによって、かなりの確度をもって須恵器生産の最小単位である工人レベルまでの追求が可能であることが明らかとなった。

これを簡単にまとめておくと、須恵器窯P-1床面Ⅰ出土のヘラ記号を有する蓋杯に関しては、以下の事象を抽出する



V-1-図18 床面Ⅰ出土ヘラ記号蓋杯の法量分布

ことが可能である。

- ①同一工人が複数のヘラ記号を用いることはない。
- ②ヘラ記号を用いている工人が無記号の蓋杯を製作することはない。
- ③3人前後の工人が同一のヘラ記号を共有してグループを構成することが多い。ただし、D群およびG群などのように他群に比して明らかに工人数が少ない場合がある。
- ④形態的特徴もさることながら、同一工人が製作した蓋杯は、大きさが一定である。
- ⑤窯詰めに際しては同一工人グループが製作した蓋杯は意識的にまとめられているが、同一工人製作の須恵器をまとめようとする意識は認められない。
- ⑥須恵器窯P-1を共有していた工人のうち、同一ヘラ記号を共有する工人グループが6グループ存在し、それを構成する工人は最低でも15人を確認できる。

以上が、須恵器窯P-1床面I出土須恵器のうち、ヘラ記号を有する蓋杯の検討によって得られた事象である。ただし、野上氏がMT206-I号窯の検討²⁶⁾において示した「窯の中心的な工人グループは、本来他者の製品と区別する必要のない、本窯を主体的に管理する中心グループであり、無記号のものにその主張がある」という指摘は傾聴に値する。

須恵器窯P-1床面I出土蓋杯では、ヘラ記号を有する蓋杯が多いとはいえ、それでも全体に占める無記号の蓋杯は61%（口縁残存度）で過半数を超えている。

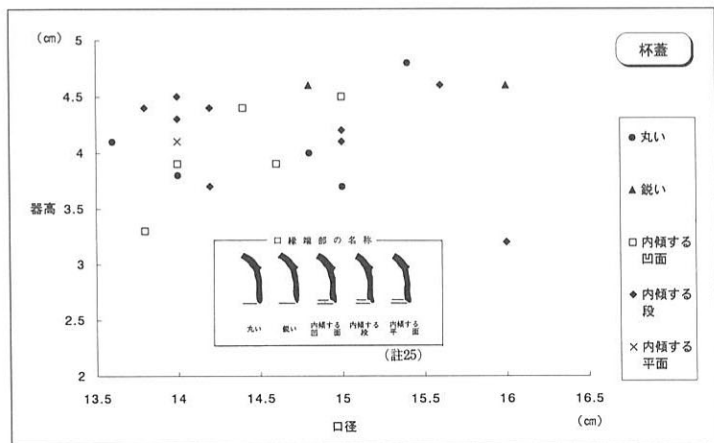
以下では、無記号の蓋杯の状況についても簡単に触れておくことにしたい。

c. 無記号の蓋杯の検討

無記号の蓋杯においては、基本的にヘラ記号を有する蓋杯の分析と同様の諸属性を観察することによって比較検討を行う。

ここでは、ヘラ記号を有する蓋杯の分類において有効であった口縁端部の形態と法量の関係について検討を行う。なお、検討に際しては口縁端部に形態差が顕著な杯蓋を対象とし、基本的に完形に還元される22点を分析の対象とし、歪みを生じているものと小片を分析の対象から外した。

ヘラ記号という有効な手掛かりがなく、同一工人の製作した無記号の蓋杯の抽出は困難である。しかしながら、口縁部形態の明確な差によっても最低で5群に分けることができ、図19に示したように同形態の口縁部でありながら、法量に大きなばらつきが認められ、さらなる細分の可能性が高いものといえる。細部技法等の属性の客観的データを個別に提示して比較検討を行う余裕はないが、口縁部と同様に



V-1-図19 床面I出土無記号蓋杯の法量分布

顕著な形態差として表出する稜の形態差をも勘案し、筆者が実物を対照しながら行った分類作業では、最低でも15群に分けることが可能である。

これはあくまでも、同一工人が基本的に、ほぼ同大、同形態の口縁端部や稜を作り出すことを前提としたものであり、同一工人がまったく形態的特徴を異にする蓋杯を製作した場合には成立しない。しかしながら、先のヘラ記号を有する蓋杯の検討によって、同一工人はかなり高

い精度で同大、同形態の蓋杯を製作しえた可能性が高いものと判断している。

したがって、無記号の蓋杯は形態、法量、技法の特徴によって最低15群に分けられることから、無記号の蓋杯を製作していた工人数は15人以上であったものと憶測する。

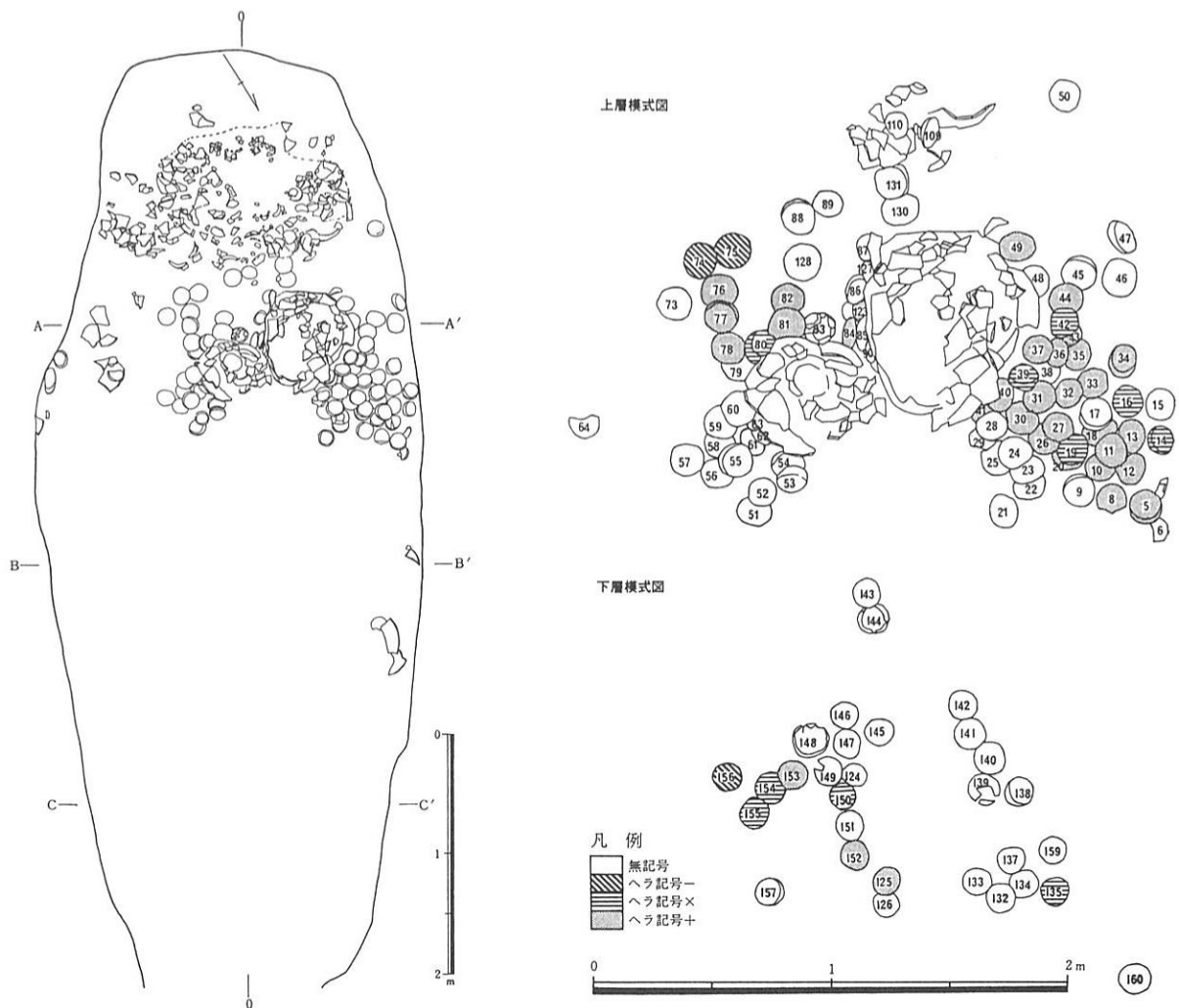
ここでは、本窯を主体的に管理する中心的な工人グループであった無記号蓋杯の製作工人グループを仮に「工人グループZ」としておく。

3. 陶邑窯跡群におけるヘラ記号資料

陶邑窯跡群におけるヘラ記号については、田辺昭三²⁷⁾、中村 浩²⁸⁾、野上丈助²⁹⁾ 各氏の検討がある。ここでは、ヘラ記号をもつ蓋杯がほぼ原位置を保って多数出土しているMT206- I 号窯の状況について中村、野上両氏の論考を参考にして概観するとともに、須恵器窯P- 1 床面 I の状況との比較を試みたい。

なお、ヘラ記号のもつ意味については、中村氏が「窯詰め」および「窯出し」時に生産者が、類似製品の区別のために使用した記号であるという見解を示している。先に示した須恵器窯P- 1 における蓋杯の状況を勘案しても、この指摘は的確で正鵠を得たものであり、異論のないところである。

中村氏はさらにMT206- I 号窯において窯詰め時の原位置を保って遺存していた160セットの蓋杯中



V-1-図20 MT206- I 号窯窯体内の須恵器出土状況

(左図は註30文献所収、右図は註26文献所収)

に「一」のヘラ記号3セット、「十」のヘラ記号39セット、「×」のヘラ記号12セットを抽出して検討を行っている。

その配置については、「“ヘラ記号”別の分布は必ずしも整然たる状況とはいえない」としながらも、「漠然とはしているが、その配置に一定の法則が存在した可能性は十分感受しうる」との指摘を行っている。また、「ヘラ記号」を有する蓋杯については、「細部手法を観察した結果、記号毎のまとまりと異なる記号間の手法差を看取しえた。この手法差とは、口縁部などに表われる、いわゆる作りぐせなどの同一製作者によって生じる差異ではなく、明らかに製作者の差によって生じるものと考えてよいもの」としている。結果的に「記号差＝手法差となることから、同一窯、同一床面にあっては、異なる手法を有する同一器種の製品が焼成されていたこととなる。言い換えれば、本窯については異なる工人あるいは工人群が同時焼成を行っていたという事実が指摘しうる」とし、窯の使用（操業）にあたっては、共有あるいは共同使用という関係が存在していた可能性を指摘している。

なお、野上氏はこれを受けて「中村が無記号のものを除外して論を進めたり、細部技法のちがいにについて必ずしも明確に示さなかった点に不満が残る」とし、「ヘラ記号3種のものの特徴、無記号のものの手法的分類こそ、工人の抽出を前提として示すべきであった」との指摘を行っている。また、当該窯の窯体内出土土器は『陶邑Ⅳ』³⁰⁾に掲載されているが、確かに野上氏が指摘するように、数種に分類はなされているものの、ヘラ記号と蓋杯の形態的特徴の関係をこの報告書から抽出して検討することはできない。

また、野上氏は時期別のヘラ記号の出現頻度を分析し、そのピークがⅡ～Ⅲ段階にあることとし、奈良時代後期のⅣ・3段階に減少することを指摘し、これが労働編成が急激に変化したことによるものであるとしている。さらに、氏はⅡ段階のMT200-I号窯ではヘラ記号が「14種あり、この点は同窯出土の高杯が透かしの有無、形状によって14形態に分類されることと無縁でない」とし、同じくⅡ段階の「TK43-I号窯のヘラ記号は22種確認され、蓋杯における個体差は、蓋36、身27に分類できるようである」としている。そのほか、Ⅲ・3～Ⅳ・2段階のTK316号窯では、26種のヘラ記号の存在を指摘し、Ⅲ・3段階におけるヘラ記号の急激な減少を指摘している。

MT200-I号窯、TK43-I号窯、TK316号窯ともに灰原出土資料を含むものであるが、Ⅱ～Ⅲ段階においては、1基の窯に関わる工人がかなり多数であったことを示唆している。これは須恵器窯P-1床面Ⅰを共有していた工人が7グループ30人以上であったという推定とも呼応している。

資料的制約や筆者の力量不足によって、検討不十分に終始しているが、須恵器窯P-1床面Ⅰ出土蓋杯は、中村氏が指摘した複数工人による窯の共有あるいは共同使用という事象をきわめて具体的に補完しうる資料であるといえる。

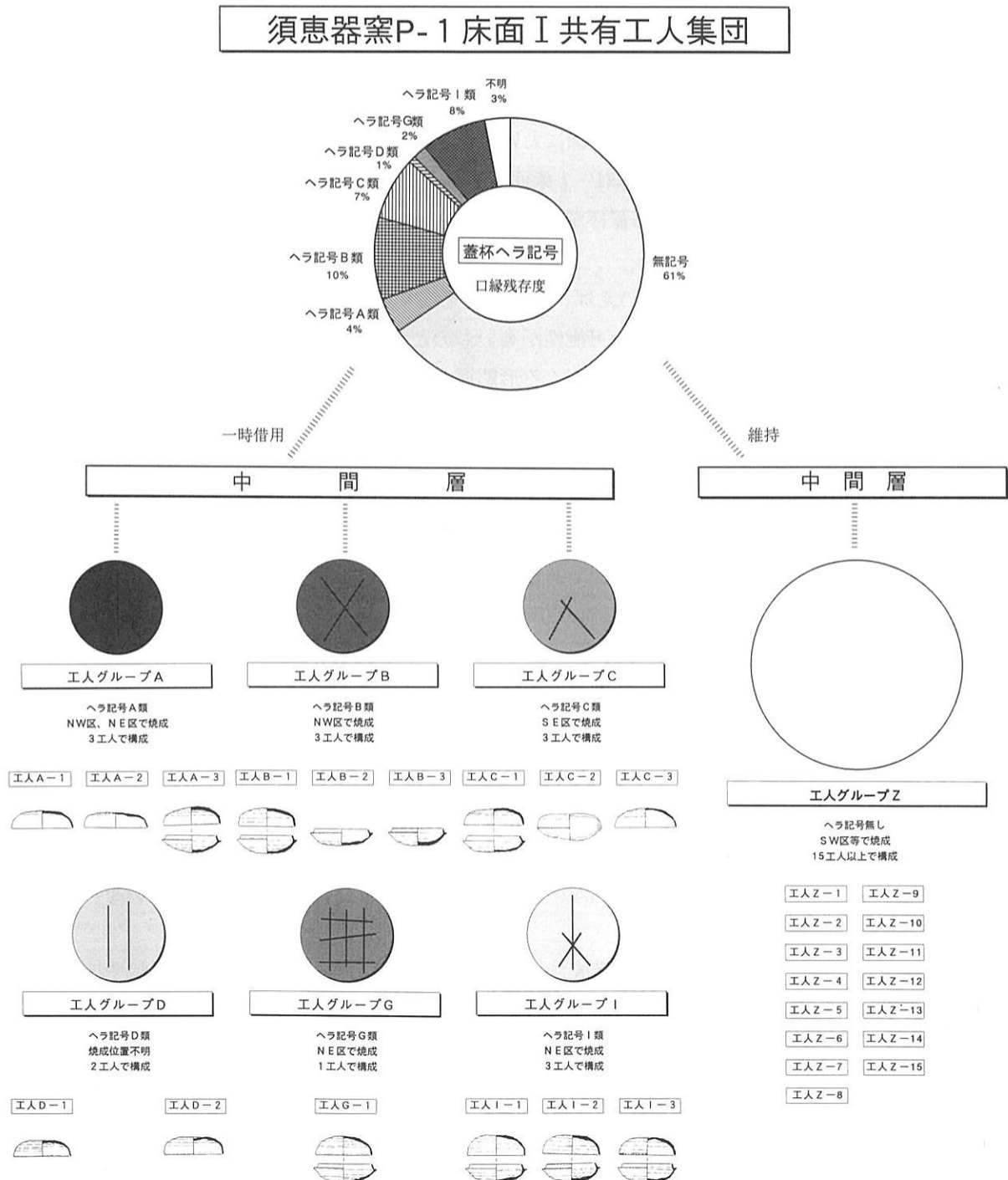
4. 須恵器窯P-1をめぐる工人組織

以上、須恵器窯P-1床面Ⅰから出土した須恵器の検討を行ってきた。とくにヘラ記号を手掛かりとして同一工人によって製作された蓋杯を抽出し、結果として同一ヘラ記号を記す蓋杯は、ヘラ記号を共有する工人グループによるものであるという事実を指摘した。また、あわせて無記号の蓋杯の比較検討を行い、これも多数の工人によるものであることを指摘した。

単独の窯跡資料であり、時期別の変遷等については検討を加えることはできないが、ヘラ記号がピークをむかえる6世紀代の須恵器窯のモデルとして須恵器窯P-1床面Ⅰを共有していた工人の組織構造について検討を加えておくことにしたい。

ヘラ記号を有する蓋杯については、すでに各個に検討を加えてきたように複数の工人が同一ヘラ記号を共有してグループを構成していることが明らかとなった。ただし、わずかに遺存した床面からの出土資料という点での制約と限界は厳然として存在している。しかしながら、推定される工人グループの構成人員は出土量の多寡と呼応しており、ほぼ当時の実態を示しているのではないかと考えている。

さらに、出土量が比較的多いA・B・C・Iの各群では3人を1単位として工人グループを構成していることが看取される点は重要である。



V-1-図21 須恵器窯P-1 床面 I 共有工人の構成推定図

また、数量的検討によって無記号の蓋杯が過半数を占めるという事実は明らかであり、野上氏が指摘するように窯を主体的に使用する工人グループZは、他の蓋杯と区別する必要がない無記号蓋杯の製作工人グループであり、先述のように15人以上の工人がその製作に関与していた可能性が高い。

なお、ヘラ記号を記した蓋杯を製作していた工人グループは、3人以下の工人で組織されており、窯詰めの際にも意図的に他グループの製品と区別しようとしている状況を看取することができる。また、再三にわたって述べているように須恵器窯P-1では焼成部の一部が遺存していたのみであるが、ヘラ記号を有する蓋杯の比率が高く、40%に近い数値を呈している。ちなみに、須恵器窯L-1では灰原出土資料であるが、蓋杯のうち、ヘラ記号を有する蓋杯の占める割合は4%に満たない。

これが、そのまま両窯跡をめぐる工人集団の特徴となる可能性もあるが、須恵器窯P-1の場合には灰原出土資料の検討を行っておらず、即断はできない。

しかしながら、先に掲げたMT206-I号窯においても、窯詰め状態で検出された蓋杯に占めるヘラ記号を有する割合は34%であり、須恵器窯P-1床面Iの状況と大差がない。したがって、須恵器窯P-1の場合には、とくにヘラ記号を有する蓋杯が多く窯詰めされていた部分が、偶然に削平を免れて遺存した可能性が高いものと判断する。

結果的に、須恵器窯P-1に関していえば、ヘラ記号を有する蓋杯を製作していた工人集団は窯詰めの際に、製品を意図的にまとめていた可能性が高いものと考えうる。

なお、図21では中村氏が提示した「窯をめぐる形態模式想定図」³⁰⁾のうち、第3形態の概念にこれまでの検討で推定した須恵器窯P-1床面Iを共有する工人集団を当てはめている。

資料面での制約があるが、遺存していた須恵器蓋杯のみの検討においても30人以上の工人が床面Iに関与していたことが知られる。

また、すでに述べてきたように床面Iを共有する工人集団は、大きく二分することが可能である。

一方は無記号の蓋杯を製作する工人集団である。ここでは工人グループZとして一括しているが、それを構成する工人は15人以上と多く、実際の組織としては複数の工人グループに細分されている可能性もある。

ただし、無記号の蓋杯については、諸先学が指摘するように、他の工人グループが製作した類似製品との区別が必要とされない製品であり、その製作工人集団は当窯を主体的に使用していた工人集団であるといえる。

また、他方はヘラ記号を記した蓋杯を製作する工人集団である。これについては既述の通り、ヘラ記号を手掛かりとした工人の特定を行い、ヘラ記号を共有する6工人グループと、それを構成する15工人を抽出した。なお、ヘラ記号を共有する工人グループには3人を一単位としているものが多い点は留意される。

また、各工人グループは複数の工人で構成されてはいるものの、製作される蓋杯の形状や技法的な特徴は同一グループ毎においては、大局的には共通する部分が少なくない。その紐帯関係については、家族や師弟関係であるのか否かという点は、にわかには判断できない。しかしながら、上記のように製作される蓋杯が似通っているという点を勘案するならば、ヘラ記号を共有する工人グループは強い紐帯によって結びついていた可能性が高いものといえる。

以上、須恵器窯P-1床面Iを共有する工人集団の組織構造について検討を加えた。その内容については先述の通りであるが、1基の窯に関わる工人が予想以上に多いという結論に至った。

この事実は、当該期における群集墳において須恵器を用いた葬送儀礼が盛行することによる需要の拡大と陶邑窯跡群を離れた周辺地域にまで新たに須恵器窯造営が広がっていくことと無縁ではない。

以下では、この点についての憶説を提示して向後の課題としておきたい。

第4節 結語

1. 陶邑窯跡群の拡大とその背景

Ⅱ期の後半段階における須恵器窯の新たな出現については、すでに野上氏が天野川主谷を例にとって検討を加えている。詳細はここでは省かせていただくが、群集墳の造営とそれに伴う須恵器の急激な増産の背景に明確な王権の意図の存在を指摘している³²⁾。

天野川主谷におよんだ近年の発掘調査は、当該地に新たに造営された須恵器窯が、野上氏の予想していたようにⅡ期の後半、すなわち群集墳の盛行期に平行するものであることや群集墳形成の廃止段階で操業を中止していることを明らかにしている。同様に日置荘遺跡の調査において検出した須恵器窯もその周辺で検出される須恵器窯群とともに天野川主谷における操業と盛衰をともしている。

当該期における須恵器窯の造営は陶邑窯跡群の東側の天野川主谷に顕著であるが、日置荘遺跡をはじめとする北側へも大きく広がりをみせている。とくに、本稿で検討を行った口縁端部に刻み目状調整を施した杯蓋は、図22に示したように群集墳盛行期に陶邑周辺部に新造された須恵器窯からかなりの割合で確認される点は重要である。

また、陶邑窯跡群においては、管見にのぼる範囲でこのような技法的特徴を有する蓋杯は石津川以西のTK、MT地区に見られるのみであり、群集墳盛行に伴う陶邑周辺部における新規の須恵器生産には、この両地域の工人が派遣や指導という形で深く関与していた可能性が示唆されるのである。

また、本稿では須恵器窯P-1の検討を行い、床面Ⅰを共有していた工人が最低でも7グループ30人であったことを指摘した。群集墳の造営に伴う須恵器の需要拡大は須恵器窯を急増させることとなった。しかし、このためには須恵器の生産に伴う薪の伐採、粘土の採掘、製品の運搬・搬出や何よりも多量の須恵器生産を可能とする工人の新たな養成や編成が必要であったことはいうまでもない。

本稿で検討を加えた須恵器窯L-1や深井畑山窯跡群などは、必ずしも須恵器窯造営に適した谷地形を選ぶことなく、非常に浅い支谷に造営している状況が看取される。もちろん、その背景には薪や粘土、運搬の便などの諸条件が考えられるが、最も大きな要因は、須恵器の増産に伴う人員の確保が第一義的目的ではなかったかと憶測する。

現段階では、具体的な事例を挙げることはできないが、陶邑窯跡群から北側の比較的平坦な地形を有する地域へと須恵器窯の分布が広がっていくのは、人員確保のために意図的に既存の集落付近へ造営したためであると考えるのである。

いずれにしても、広範に広がる当該期の須恵器窯の分布は、結果的に急激な須恵器の増産に対応することができたことと、それに伴う工人の増員等の再編成が円滑に進められたことを示している。加えて、蓋杯製作に関する技法が共通することは先述の通りであり、新造須恵器工房への工人の派遣、養成が一元的に行われたことを示唆している。

とくに日置荘遺跡須恵器窯P-1の場合には、大型の円筒埴輪等を焼成する埴輪窯P-1と時期的にも地理的にも近接しており、やはりその背景には組織的な権力の存在が示唆されるのである。

2. 需要と供給に関する予察

群集墳盛行期に陶邑周辺部に新造された須恵器窯で生産された蓋類の口縁端部に刻み目状の調整を有するものが多く、製作技法に共通する点を指摘した。

管見にのぼる大阪府下の類例については表6に記した通りである。

陶邑窯跡群では石津川以西のMT地区やTK地区に所在する数基の須恵器窯からの出土が確認されるが、須恵器窯全体に対してはわずかな部分を占めるのみである。それに対して陶邑窯跡群の北側および東側に6世紀に入って新造される須恵器窯での出土は顕著であり、桜井谷2-17窯跡の排水溝で出土した蓋杯が気に掛るが、大局的にみた場合、時期的にも地域的にかなり限定できる技法の特徴であると判断する。

消費地側の出土資料としては、その分布が陶邑窯跡群近郊に限られたものでなく、遠くは長崎県対馬の下ガヤノキ遺跡での出土が認められるほか、全国各地でその類例が散見される。

表6および図22には管見にのぼる範囲で消費地側の出土資料を含めて表示している。生産地については先に記した通りである。

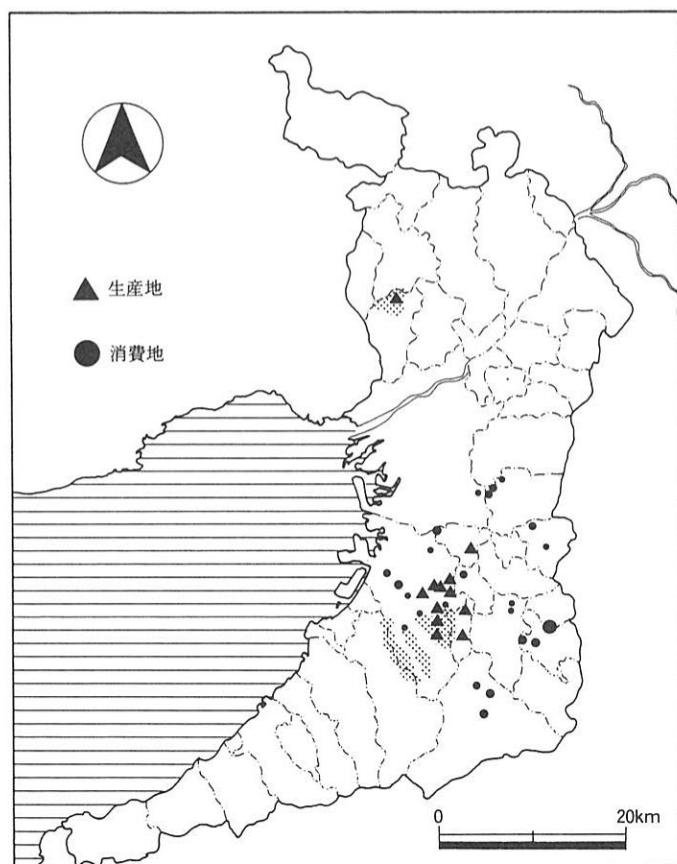
とくに留意される事例としては陶邑窯跡群の東側に展開する一須賀古墳群をはじめとする周辺の高墳群が特筆される。一須賀古墳群ではB3号墳などから口縁端部に刻み目状の調整を有する杯蓋が出土しており、数点のみが出土する他遺跡と比して際立った存在である。

また、出土した蓋杯全体に占める口縁刻み目状調整を有する杯蓋の割合は須恵器窯L-1で7.8%（口縁残存度）という数値を示しているが、一須賀古墳群（A～F,I,K,L,O,Q,WA支群）におけるその構成比の比率は8.3%³³⁾であり、総数に大きな差があるために単純には比較できないものの、非常に近似した数値を示している点は留意される。

さらに、数量的検討によって焼成されている須恵器の器種構成が蓋杯に偏重している点を指摘したが、この点も看過できるものではなく、当該期の群集墳中の高墳の副葬、供献品に須恵器蓋杯がかなりの量を占めているのに対して甕が僅少であるという事実とも呼応しているのである。

また、先に異形杯とした須恵器が須恵器窯P-1から出土しているのは先述の通りであるが、その類例を探索すると、いずれも口縁端部に刻み目状調整を有する蓋杯を出土している一須賀古墳群と高井田横穴群に類例を見出すことができるという事実がある。

他の須恵器窯における分析を欠いている段階においては、憶測の域を出るものではない。



V-1-図22 口縁端部に刻み目を有する須恵器の分布

段階においては、憶測の域を出るものではない。

ないが、生産地と消費地における器種構成比や特徴的な器形や技法をもつ須恵器の検討によって、これまでは漠然と陶邑産とされていた須恵器群の生産地が、考古学的にさらに限定できる可能性を指摘しておきたい。

本稿では、その可能性の一つとして陶邑北側周辺部の須恵器窯群と一須賀古墳群との関連を指摘したが、これ以外には個別具体的な需要と供給の関係については明示しえない。また、実物を相互に比較するといった基礎的な検証を経していない点でも問題も多いことは自認している。

今回は特徴的な蓋杯口縁端部の刻み目状調整と異形杯に限って検討を加えたが、今後は特徴的なヘラ記号の比較³⁴⁾や内面の同心円紋スタンプによる工具の同定³⁵⁾などを行うことによって、純粋に考古学的に生産地と消費地を点と点で結ぶことも夢ではないと考える。

実際、陶邑窯跡群ほど大きくはないが、福岡県小郡市では苅又窯跡群の調査でヘラ記号や技法の特徴から複数の窯を使用する工人が特定され、さらには、そこで生産された須恵器が三国丘陵の古墳や住居から出土することも確認されているのである³⁶⁾。

以上、日置荘遺跡で検出した須恵器窯2基の基礎的分析から6世紀代における陶邑周辺部の須恵器生産について検討を加えた。

時間的な制約から検討不十分に終始しており、事例や重要文献の遺漏も多いのではないかと危惧する。また、後段の検討では膨大な数の須恵器窯とそこで生産された大量の須恵器中のわずかな部分をピンポイント的に検討した点で、いささか心もとない部分も少なくない。

筆者は自然科学による胎土分析の有効性を否定するものではない。しかし、多分にそれに頼っている自らへの警鐘の意味も込めて、本稿では基礎的な考古学的検討を試みた次第である。

なお、本稿をまとめる過程で調査担当の入江正則氏および整理担当の森屋美佐子氏には多大な協力を得るとともに、中西靖人、芝野圭之助、一瀬和夫各氏には分析に際して多くのご教示を賜わった。深謝。

註

- 1) 大阪府教育委員会が1986年度に刊行した『大阪府文化財分布図』では、須恵器窯P-1を包括して陶邑窯跡群の範囲が示されているが、1991年度刊行の『大阪府文化財分布図』ではその範囲が図1の範囲にせまられている。
大阪府教育委員会 1986・1991『大阪府文化財分布図』
- 2) 日置荘遺跡の調査時に筆者らが確認した須恵器窯跡であり、前掲註1の『大阪府文化財分布図』1991では剣池西窯跡という名称が与えられている。なお、採集遺物の一部は以下の文献に掲載されている。
大阪府教育委員会・財大阪文化財センター『日置荘遺跡(その5)』 1989
- 3) 堺市教育委員会 『日置荘遺跡発掘調査報告書』(『堺市文化財調査報告』第52集) 1991
- 4) 共通する特徴として胴部中位に穿孔を有するものである。用途は不明であるが、穿孔位置が一定していない上に調整が粗雑であり、製品として生産されたものではない可能性も高い。
- 5) 類似する須恵器としては兵庫県加東郡社町上三草古墳群出土のものがある。ただし、当該土器は2個所に穿孔を有する点で当窯出土のものとは異なる。山田邦和氏にご教示を得た。
- 6) 器種名称および各部位の呼称については田辺昭三氏、中村 浩氏をはじめとする諸先学の研究成果に準拠している。
- 7) 江浦 洋「同心円文スタンプを有する須恵器蓋杯の製作技術」『鴨谷池遺跡』 1986 明石市教育委員会・同志社大学考古学研究室
- 8) 大阪府教育委員会・財大阪文化財センター 『小阪遺跡』 1992
- 9) 少路窯跡遺跡調査団 『桜井谷窯跡群2-17窯跡』 1982
なお、本窯の略称はTN2-17であるが、これは陶邑窯跡群における谷山池地区の略称と混同する恐れがあり、本稿ではあえて用いていない。

- 10) 田辺昭三「須恵器の製作技術」『須恵器大成』 1981 角川書店
- 11) 植野浩三「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』第2号 1983 奈良大学
- 12) 八賀 晋「須恵器」『日本の美術』No.170 1980 至文堂
- 13) 中村 浩「須恵器の製作手法」『陶邑Ⅰ』 1976 大阪府教育委員会
- 14) 白石耕治「6、7世紀の須恵器の編年と製作技法—陶邑古窯址群谷山池地区を例として—」『考古学研究』141 1989 考古学研究会
- 15) 前掲註7
- 16) 小丸古墳群調査団 『小丸古墳群』 1985
- 17) 福岡市教育委員会 『広石古墳群』 1977
- 18) 園部町教育委員会 『曾我谷遺跡発掘調査概要』 1977
- 19) 江浦 洋「古墳時代窯跡出土須恵器の技法的特徴」『日置荘遺跡（その3）』 1988 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 20) 堺市教育委員会 『堺市文化財調査報告』第50集 1990
- 21) 堺市教育委員会 『堺市文化財調査概要報告』第3冊 1990
- 22) 杯身の立ち上がり部を欠いたような形状を呈する須恵器である。本来であれば、適当な名称を付すべきであるが、ここでは便宜的に異形杯と仮称しておく。
- 23) 図10には下記の文献に掲載されている実測図を天地を逆転して掲載している。一瀬和夫氏のご教示によれば、日置荘遺跡須恵器窯P-1出土のものとは、成形の手法が異なっており、似て非なるものである可能性も残る。しかしながら、筆者は高井田横穴群出土例とともに口縁端部が外上方にのびる特徴などの共通する点を評価する立場をとりたい。なお、事実誤認の責はすべて筆者にある。
大阪府教育委員会 『一須賀古墳群資料目録Ⅰ 土器編（実測図）』 1992
- 24) 柏原市教育委員会 『高井田横穴群Ⅳ』 1992
- 25) 表8、図19に示した口縁端部の形態別の名称については『陶邑Ⅴ』第44図に準拠している。
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『陶邑Ⅴ』 1982
- 26) 野上丈助「高蔵寺地区・陶器山地区出土のヘラ記号とその意義」『陶邑Ⅴ』 1982 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 27) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』 1966 平安学園考古学クラブ
- 28) 中村 浩「ヘラ記号について—工人組織検討の一資料として—」『陶邑・堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要』 1970 大阪府企業局・大阪府教育委員会
中村 浩「須恵器生産に関する一試考—和泉陶邑窯における陶工組織について—」『考古学雑誌』63-1 1977 日本考古学会
- 29) 前掲註26
- 30) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『陶邑Ⅳ』 1979
- 31) 中村 浩「須恵器生産に関する一試考—和泉陶邑窯における陶工組織について—」『考古学雑誌』63-1 1977 日本考古学会
- 32) 野上丈助「高蔵寺地区・陶器山地区須恵器操業の推移について」『陶邑Ⅴ』 1982 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 33) 一瀬和夫氏のご教示によれば、前掲註23文献には、実測可能な遺物すべてを網羅して掲載しているとのことであり、そこから出土点数や構成比を算出することも可能であると考ええる。
- 34) とくに須恵器窯P-1床面Ⅰで出土した蓋杯Ⅰ群などは、ヘラ記号が非常に特徴的であり、今後の調査で消費地を特定しうる可能性も皆無ではない。
- 35) 須恵器窯P-1床面Ⅰの蓋杯B-1群は、同一工人の手によるものであり、当然のことながら同一の当て具を用いて同心円紋スタンプの押捺を行っている。第Ⅲ部の図Ⅲ-27に掲載した須恵器窯L-1出土の蓋杯に残された同心円紋当て具も細部の検討によって1～3が同一工具によるものであり、同様に4と5も同一工具によるものであることが容易に判別できる。ヘラ記号、口縁端部刻み目とともに消費地における産地同定の決定打となる可能性を秘めている。
- 36) 宮田浩之氏をはじめとする小郡市埋蔵文化財センター各位のご教示を得た。
小郡市埋蔵文化財調査センター 『特別展 古の陶工たち』 1994